

福岡市博多区

南八幡遺跡群(II)

八幡 南遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集

1986年

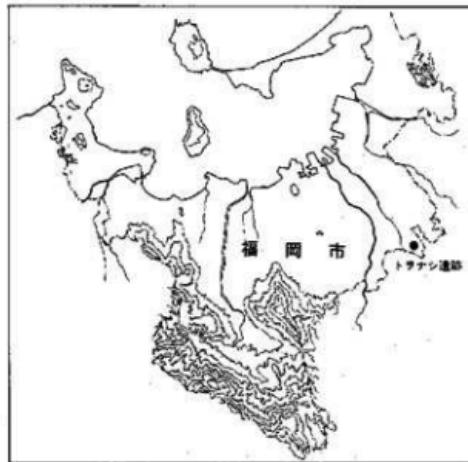
福岡市教育委員会

福岡市博多区

南八幡遺跡群(II)

トヲナニ 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第128集



1986年

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は『21世紀へつなごう緑と心豊かな活力の街』を基本理念として都市づくりを進めています。人間優先の道づくりもその一つです。

このたび国鉄南福岡駅前における自転車等の駐車対策として2階建駐車場の建設が計画され、その工事に先立ってトヨナシ遺跡の発掘調査を実施いたしました。

今回の発掘調査によって古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、福岡市の歴史を語るうえで重要な資料を得ることができました。

これまで1500年の長い間、地中深く静かに眠っていた遺跡は残念ながら消滅してしまいましたが、駐車場はこれにかわる21世紀へ向けての新しい創造物として設計建設されたものと思います。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し、心から感謝の意を表します。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となることを願うとともに研究資料としても活用いただければ幸いです。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎



歩道を占拠した自転車（南福岡駅前 1984年12月）

例　　言

1. 本書は、国鉄南福岡駅前における駐輪場建設工事に先行して発掘調査した南八幡遺跡群トランシ遺跡の報告書である。
2. 今回報告する遺跡は、福岡市博多区寿町二丁目 119-1 にあり、旧字名からトランシ遺跡とした。
3. トランシ遺跡の発掘調査は、1984年10月より開始し、12月まで実施した。
4. トランシ遺跡は、発掘調査終了後に建設工事が行なわれ、現在2階建の駐輪場が完成している。
5. 本書に掲載した遺構、遺物の実測図と遺物写真は、各々縮尺を統一するように努めた。堅穴住居跡は1/40、かまどは1/30、掘立柱建物跡は1/50か1/60、遺物は実測図、写真ともに1/3である。また、遺物は次の頭文字を付し、各遺構ごとに通し番号とした。
須恵器 (SU)　　土師器 (H)　　石器 (S)　　瓦 (K)
6. 本書の編集、執筆は、大庭康時と力武卓治が協議、分担して行なった。遺物整理から報告書作成まで、村田喜代美さんと松田美富さんの多大なご協力があった。
7. トランシ遺跡の出土遺物や、実測図、写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵される予定である。



完成した自転車駐車場

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 発掘調査に至るまで.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	1
第2章 発掘調査の記録	4
1. 発掘調査の概要と経過.....	4
2. 遺構と遺物.....	6
住居跡 第1号住居跡.....	11
第2号住居跡.....	18
第3号住居跡.....	21
第4号住居跡.....	26
第5号住居跡.....	31
第6号住居跡.....	34
第7号住居跡.....	34
第8号住居跡.....	38
第9号住居跡.....	40
建物跡 第1号掘立柱建物跡.....	42
第2号掘立柱建物跡.....	44
第3号掘立柱建物跡.....	46
第4号掘立柱建物跡.....	48
堅穴 第1号堅穴.....	49
第2号堅穴.....	56
第3号堅穴.....	59
第3章 小 結	60

挿図目次

1 トナシ遺跡の位置と周辺の遺跡(縮尺1/25,000).....	2
2 トナシ遺跡地形図.....	3
3 トナシ遺跡地形図.....	3
4 トナシ遺跡全景(南から).....	4
5 発掘調査の範囲図(縮尺 1/500).....	5
6 トナシ遺跡全景(北から).....	5
7 発掘調査前の協議.....	6
8 発掘作業風景.....	6
9 遺跡説明の看板.....	6
10 トナシ遺跡グリッド区(縮尺 1/200).....	7
11 トナシ遺跡全景(南から).....	8
12 トナシ遺跡構造配置図(縮尺 1/100).....	折りこみ 8~9
13 トナシ遺跡北側部.....	9
14 トナシ遺跡南側部.....	9
15 第1号住居跡実測図(縮尺1/40)	10
16 第1号住居跡遺物出土状況.....	11
17 第1号住居跡かまど実測図(縮尺1/3)	12
18 第1号住居跡かまど断面.....	12
19 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	13
20 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/30).....	15
21 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	16
22 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	17
23 第1号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)	17
24 第2号住居跡実測図(縮尺1/40).....	18
25 第2号住居跡西壁の土層実測図(縮尺1/40).....	19
26 第2号住居跡.....	19
27 第2号住居跡かまど実測図(縮尺1/30).....	20
28 第2号住居跡かまど.....	20
29 第2号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)	20
30 第2号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)	20
31 第3号住居跡実測図(縮尺1/40).....	折りこみ 20~21

32	第3号住居跡遺物出土状況	21
33	第3号住居跡発掘作業風景	21
34	第3号住居跡(南西から)	22
35	第3号住居跡(西から)	22
36	第3号住居跡かまど実測図(縮尺1/3)	23
37	第3号住居跡かまど	23
38	第3号住居跡かまど	23
39	第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	24
40	第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/2,1/3)	25
41	第3号住居跡出土遺物(縮尺1/3)	25
42	第4号住居跡	26
43	第4号住居跡	26
44	第4号住居跡実測図(縮尺1/40)	折りこみ 26~27
45	第4号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)	27
46	第4号住居跡かまど	27
47	第4号住居跡かまど	27
48	第4号住居跡出土遺物(縮尺1/3)	28
49	第4号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	29
50	第4号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	30
51	第5号住居跡実測図(縮尺1/40)	折りこみ 30~31
52	第5号住居跡	31
53	第5号住居跡	31
54	第5号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)	32
55	第5号住居跡かまど	32
56	第5号住居跡かまど	32
57	第5号住居跡出土遺物(縮尺1/3)	32
58	第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	33
59	第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)	34
60	第6・7号住居跡実測図(縮尺1/40)	35
61	第6・7号住居跡	36
62	第6・7号住居跡	36
63	第6号住居跡かまど実測図(縮尺1/30)	37
64	第6号住居跡かまど	37
65	第6号住居跡かまど	37

66	第6・7号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	37
67	第8号住居跡実測図(縮尺1/40).....	38
68	第8号住居跡かまど実測図(縮尺1/30).....	39
69	第8号住居跡かまど.....	39
70	第8号住居跡.....	39
71	第8号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	40
72	第9号住居跡実測図(縮尺1/40).....	40
73	第9号住居跡.....	41
74	第9号住居跡.....	41
75	第1号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/60).....	42
76	第1号掘立柱建物跡.....	43
77	第1号掘立柱建物跡.....	43
78	第2号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/50).....	44
79	第2号掘立柱建物跡.....	45
80	第2号掘立柱建物跡.....	45
81	第3号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/50).....	46
82	第3・4号掘立柱建物跡.....	47
83	第3・4号掘立柱建物跡.....	47
84	第4号掘立柱建物跡実測図(縮尺1/50).....	48
85	第1号竪穴実測図(縮尺1/60).....	49
86	第1号竪穴.....	50
87	第1号竪穴.....	50
88	第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	51
89	第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	52
90	第1号竪穴出土遺物(縮尺 1/3).....	53
91	第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	54
92	第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	55
93	第2号竪穴実測図(縮尺1/40).....	56
94	第2号竪穴出土遺物(縮尺 1/3).....	56
95	第2号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	57
96	第2号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	58
97	第3号竪穴出土実測図(縮尺1/40).....	59
98	第3号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3).....	60

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

九州の中枢管理都市をめざす福岡市は、交通、住宅、上・下水道などの都市基盤の整備が精力的に進められているものの、一方では人口集中化に伴う様々な都市問題が起りつつある。特に朝夕の交通ラッシュは大都市と同じような様相を呈してきている。住宅開発と交通体系の整備とは有機的な関連が望まれるのであるが、交通の基幹をなす鉄道、地下鉄の各駅前における放置された自転車やバイクの数は、今日の都市問題の一つの象徴でもある。福岡市博多区の国鉄南福岡駅前もその例外ではない。この地区は西日本鉄道も交叉しており、福岡市の中心である天神へ20分の通勤圏であることから住宅開発が急激に進んでいる。福岡市南部に隣接する春日市、大野城市などはベッドタウン化が著しい。これらの新興住宅地から都心への通勤、通学はバス路線の整備が遅れているために自転車やバイクを利用して鉄道などへ乗換ぐ方法がとられ、駅前での違法駐車という結果を招いている。これらの自転車、バイクの多くは、歩道を占拠しており、本来の生活道路としての機能を奪っている。

このために福岡市は、秩序ある住宅開発と交通体系の整備を計画する一方で、各駅前で駐輪場建設を進めている。南福岡駅においては、駅前にあった那珂土木事務所の跡地に2階建の駐輪場を建設することになり、担当課である土木局街路課より、文化課に埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市土木局街路課

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係

柳田 純孝、松延 好文（事務担当）

山崎 龍男、出中 寿夫（試掘調査）、力武 卓治、大庭 康時（発掘調査）

調査作業員 大部茂久、権藤利雄、山崎光一、池田光男、山口 満、三浦 力、岸原藤雄、曾根崎昭子、桑野正子、井手口美代子、黒木静子、江越初代、間 政子、古賀博子、村崎祐子、尾崎文枝、徳永道子、石本ミスエ、野口ミヨ、長野康子、高野皓代、間加代子、宮川登志子、杉野邦子

整理作業員 深沢美代子、末永トシ子、鶴ちとせ、大庭智子、村田喜代美、松田美富

この他にも地元の多くの方々のご協力がありました。ありがとうございました。

2 周辺の遺跡



1 トラナシ遺跡の位置と周辺の遺跡(縮尺 1/25,000)

- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 トラナシ遺跡 | 9 阿岡遺跡 | 17 須坂岡本遺跡 |
| 2 那珂八幡古墳 | 10 井尻大塚古墳 | 18 曾我原遺跡 |
| 3 那珂沼口遺跡 | 11 金葉遺跡 | 19 弥永原遺跡 |
| 4 那珂原ラサ遺跡 | 12 伴農遺跡 | 20 伯家遺跡 |
| 5 那珂久平遺跡 | 13 井相田遺跡 | 21 原町遺跡 |
| 6 板付遺跡 | 14 袋野下古戸遺跡 | 22 大南遺跡 |
| 7 板付南遺跡 | 15 三茨遺跡 | 23 大谷遺跡 |
| 8 高畠遺跡 | 16 南八幡遺跡 | 24 一の谷遺跡 |



2 トナシ遺跡地形図（縮尺 1/10,000）昭和初期



3 トナシ遺跡地形図（縮尺 1/10,000）現在

第2章 発掘調査の記録

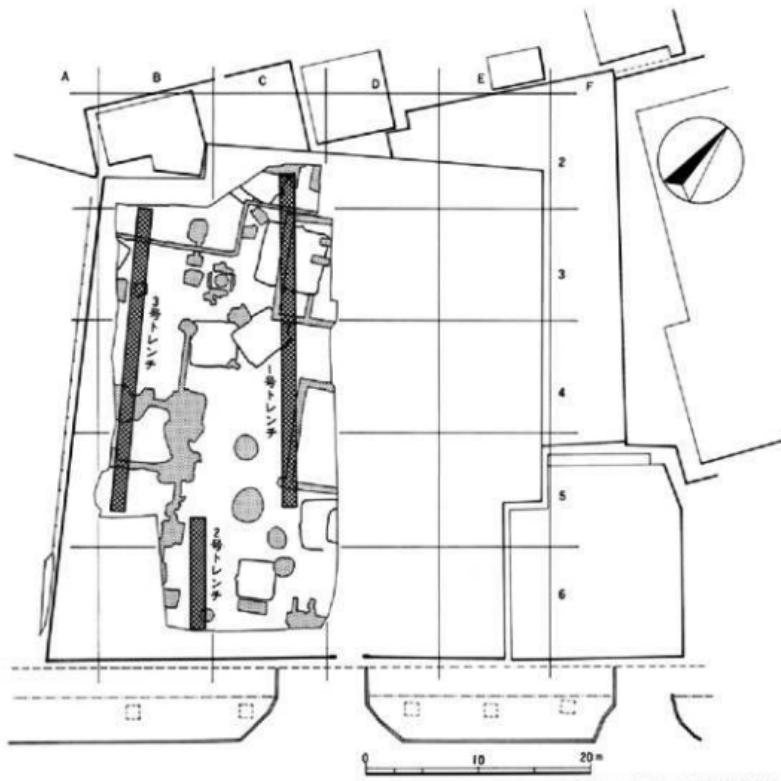
1. 発掘調査の概要と経過

試掘調査

土木局街路課が駐輪場建設を計画した用地は、博多区寿町二丁目119-1 の那珂土木事務所の跡地である。照会を受けた文化課は、当該地が昭和56年に作成発行した『福岡市文化財分布図(東部Ⅰ)』に記載登録されている南八幡遺跡群の範囲内に入っていることから現地踏査をした上で埋蔵文化財が存在している可能性が強いことを回答した。街路課は他に駐輪場の用地を確保できないために、遺跡の発掘を前提としての協議を要望してきた。このため文化課は、事前審査担当の山崎と田中が昭和59年4月21日に試掘調査を実施することになった。駐輪場建設予定地は、那珂土木事務所跡地のうち西側の約1,000 m²で、建物取り壊し後に整地されており旧地形を留めていない。試掘は対象地に3本の南北トレンチを設定し、遺構の検索と土層の観察を行なった(挿図5)。この結果、地山の明褐色ロームは北から南に傾斜しており、土層は堆積の最も厚い2号トレンチ南端部で第1層整地層(20cm)、第2層擾乱(20cm)、第3層暗褐色粘質土(10cm)、第4層黒色粘質土(10cm)、第5層黒褐色粘質土(15cm)の5層が観察された。大部分は遺物包含層である黒褐色粘質土が地山上に薄く乗っているだけで、全体的に擾乱、削平が著しいことがわかった。しかし、各トレンチとも住居跡と推定される落ちこみやピットなどが確認されたこと、周辺の遺跡分布などから全面の発掘調査が必要という結論となった。この試掘結果をもとに本調査にむけて街路課と協議を重ねたが、同じ街路課の博多駅築港線の発掘調査をしていた力武と大庭が終了後に担当することになり、この間に付近住民への連絡や作業用プレハブ建設などの準備をすることになった。



4 トラナシ遺跡全貌(南から)



5 発掘調査の範囲図(縮尺 1/500)



6 トランシ遺跡全景(北から)

6 通路と遺物

事前協議

那珂台地は、奴国王墓の推定地である春日市須玖・岡本遺跡や銅鋒鋸型を出土した大谷遺跡などがある春日丘陵から北に約6kmのびている。この台地には北側から比恵、那珂、五十川、諸岡、井尻、横手、臼佐、弥永原の各遺跡群が途切れることなく展開しており、「弥生銀座」と呼ばれるようにわが国の弥生時代を語るうえで重要な遺跡が数多く分布している。発掘調査を実施することになった当該地は、南八幡遺跡群に入るがこの遺跡群は地形的には春日丘陵の北端部に小さく突出した台地上にあり、先の那珂台地とは区別できる。現在は高度に市街化しているために旧地形を復原できないが、戦前の地図によると南福岡駅付近を中心にして手の掌状に小さな台地が北に向かって派生しており、その間の谷部は用水池に利用されている。旧字名のトヲナシを遺跡名としたが、これまでにこの遺跡群内においての発掘調査は1例にすぎない。

試掘調査後、街路課との協議を重ね、本調査を建設工事に支障のないように10月17日より2ヶ月の予定で開始した。この間、南区野多目地区の下水道工事に伴う発掘調査も併行せざるを得なかったが、12月15日に予定通りに終了した。発掘現場が道路に面していたこともあって、見学者が多く、遺跡説明用のパンフレットを作成するなどして埋蔵文化財に対する市民の理解を深めてもらうように努めた。



7 発掘調査前の協議

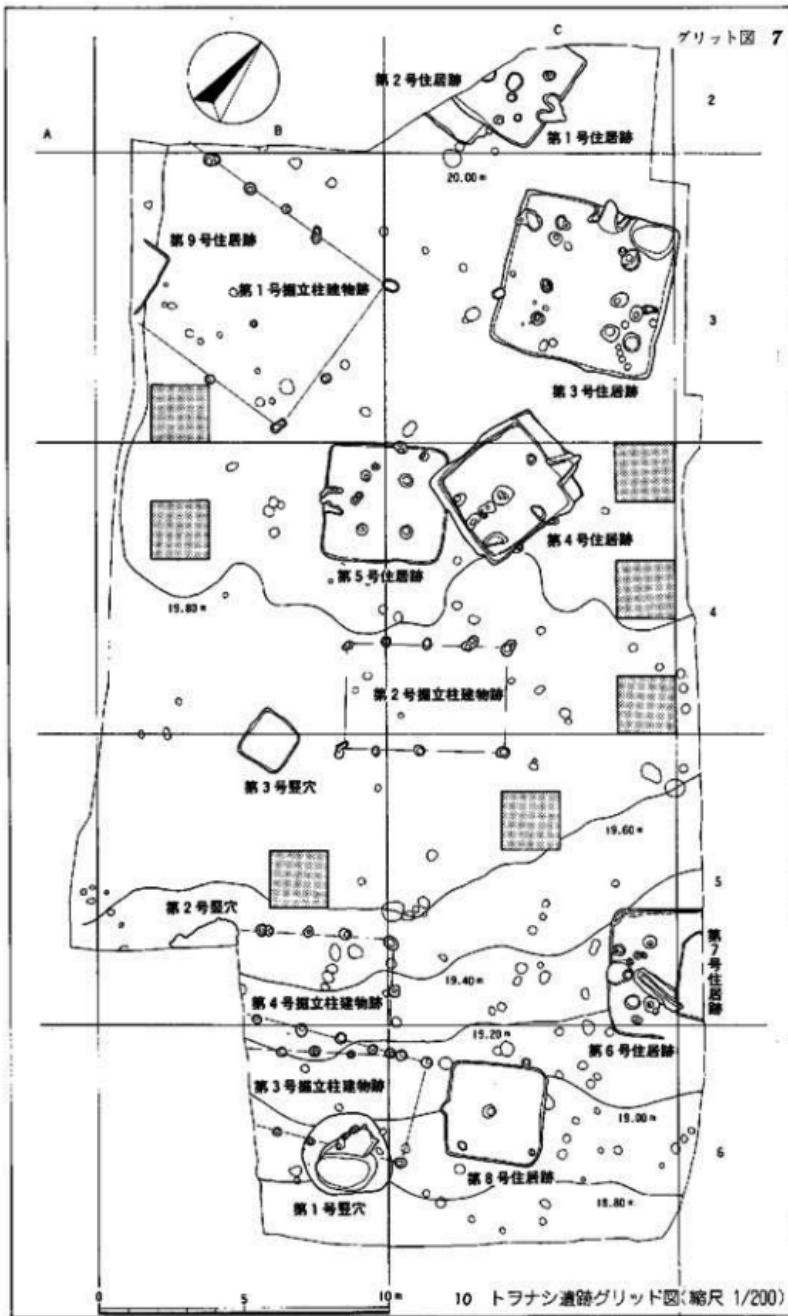


8 発掘作業風景



9 遺跡説明の看板

グリッド図 7



8 トナシ遺跡全景



11 トナシ遺跡全景(南から)



12 トランシ通路構配図(縮尺1/100)



13 トヲナシ遺跡北側部

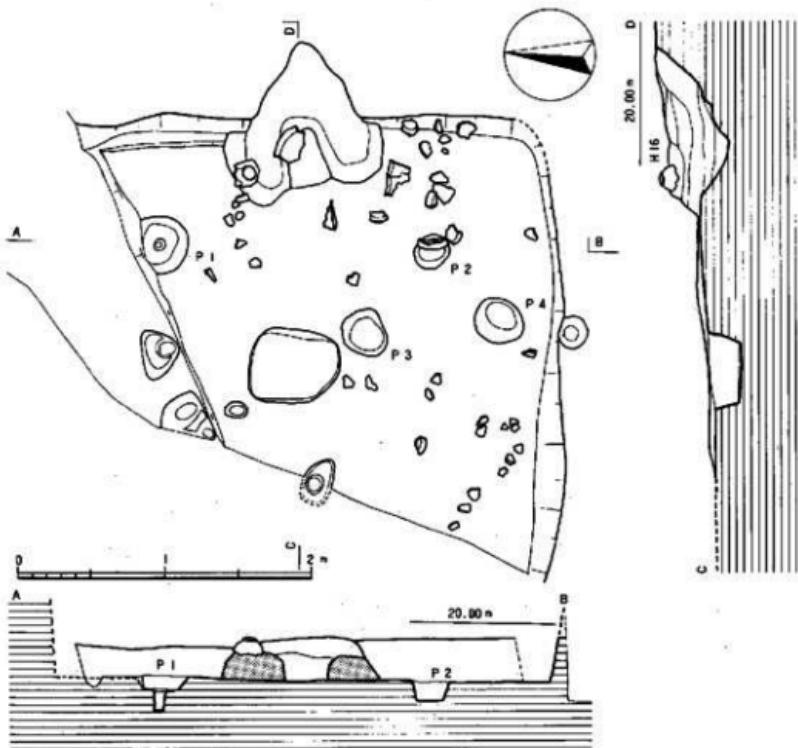


14 トヲナシ遺跡南側部

2. 遺構と遺物

本 調 査

発掘調査は、整地層のマサ土と建物の基礎などを重機によって除去することから開始した。検出した地山面は、ほぼ平坦をなしているが、中央部から南側にかけて傾斜が強くなり、南北端との差は約130cmを測る。このことからトナシ遺跡は南八幡遺跡群の台地南縁部に位置していることがわかる。確認した遺構は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡4棟、竪穴3基であるが、この他にも多数のピットがあり後世の擾乱、削平を考慮すると、さらに多くの遺構が存在したものと思われる。次に住居跡、建物跡、竪穴の順に遺構と出土遺物について記す。また、良好なロームが残っていたことから挿図10のように2mグリッドを7か所に設定し旧石器の検索も行なった。



15 第1号住居跡実測図(縮尺1/40)

(1) 住居跡

9軒の整穴住居跡を検出し、その検出順に第1号から第9号の番号を付した。このうち第1号と第2号、第4号と第5号、第6号と第7号住居跡は切りあっている。

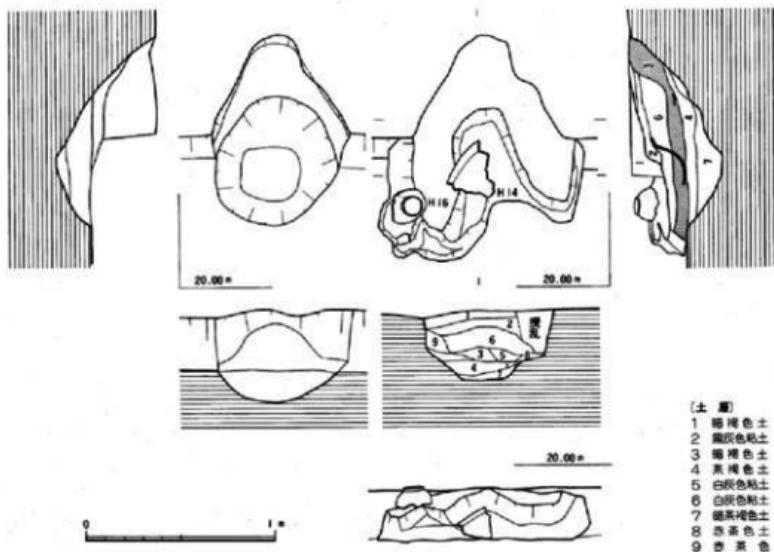
第1号住居跡 (16~23)

第1号住居跡は、発掘区の北端部に位置する。住居跡の北側は後世の擾乱を受け、さらに西壁も発掘区域外に出ているために全体を確認したわけではない。検出したのは東壁320cm、南壁310cmである。東壁の高さは20cm、南壁は50cmを測り、両壁ともほぼ直線をなす。両壁のなすコーナーは現代の排水管によって破壊されているが、これらのことから方形のプランが推測される。床面は、西に向かってわずかな傾きがみられ、7個のピットがある。これらのうちP3とP4は浅くかつ大きいことから柱穴ではなく、P1とP2が主柱穴であろう。その間隔は190cmを測る。東壁には粘土で築かれたかまどがあり、このかまどより北側には幅10cmの深い豊溝が掘られている。かまどの位置が東壁の中央にあると仮定すれば東壁の全長は340cmとなり、住居跡の中心軸とP1とP2とを結ぶ線の中心点とは、ほぼ一致することになる。床面には須恵器、土師器などの遺物が散乱した状況で出土した。床面の西側半分は地山ではなく、茶褐色土であったために遺物取り上げ後に清掃を繰り返したところ、張り床されていることがわかった。さらにその下部から別の住居跡の覆土が現われ、この住居跡を第2号住居跡とした。



16 第1号住居跡遺物出土状況

12 第1号住居跡のかまど



〔土層〕
1 暗褐色土
2 黒褐色粘土
3 墓褐色土
4 黄褐色土
5 白灰色粘土
6 白灰色粘土
7 綠褐色土
8 深褐色土
9 青褐色土

17 第1号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)

かまど 東壁に灰色粘土を用いて構築されており、南壁とのコーナーからは 170 cm の位置にある。かまどの全長は、住居外の煙出部まで含めて 85cm あり、両袖は外にわずかに開いている。左袖には鉢型土器が残っていたものの、かまど上部はすでに削平を受けており、その構造は明らかではない。かまど前面からは焼土や炭が多く出土し、周辺には遺物が集中している。

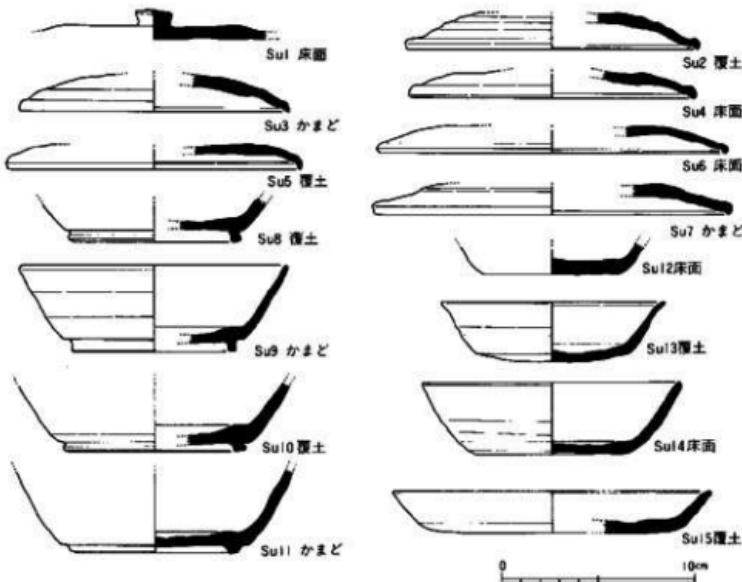


18 第1号住居跡かまど断面

出土遺物 (19~23)

住居跡の覆土、床面、かまとより須恵器、土師器、瓦が出土した。実測図の遺物番号は写真とも一致するが、実測図の番号の次には出土位置を示す床面、覆土、かまとなどの文字を付した。出土遺物は、小破片のものが多く復原完形となるものは極めて少ない。

須恵器 杯蓋 7点、有高台杯 4点、無高台杯 3点、皿 1点の計15点を図示した。これらのうち Su1、4、6、12、14が床面出土、Su3、7、9、11はかまと出土で、この他は住居跡の覆土より出土している。Su1~7は杯蓋で Su1以外は天井部を欠く。Su1は天井部のみの破片である。平坦な天井部の中央はわずかに窪み、ここに小さなつまみをつけている。内外面ともに横ナデされ、つまみの中央はわずかに突出している。Su2の天井部は平坦ではなく、ふくらんで丸みがある。ただ横ナデ調整が粗雑なため凹凸が目立つ。口縁部は小さく折り曲げている。Su3の口径は14cmを測る。砂粒の少ない胎土が用いられて、焼成はよく灰色を呈する。Su2と同じような丸みのある天井部を持つが、口縁部との境が明瞭でない。折り曲げも直角ではなく、鈍角に外に開いている。Su4はやや厚みのある口縁部となっている。天井部は平坦ではなく、調整が難である。口縁部は丸くおさめている。Su5は天井部が平坦なために背の低い器高となっている。口縁部は直角に折り曲げられてはいるが、天井部との境はシャープなつくりでは



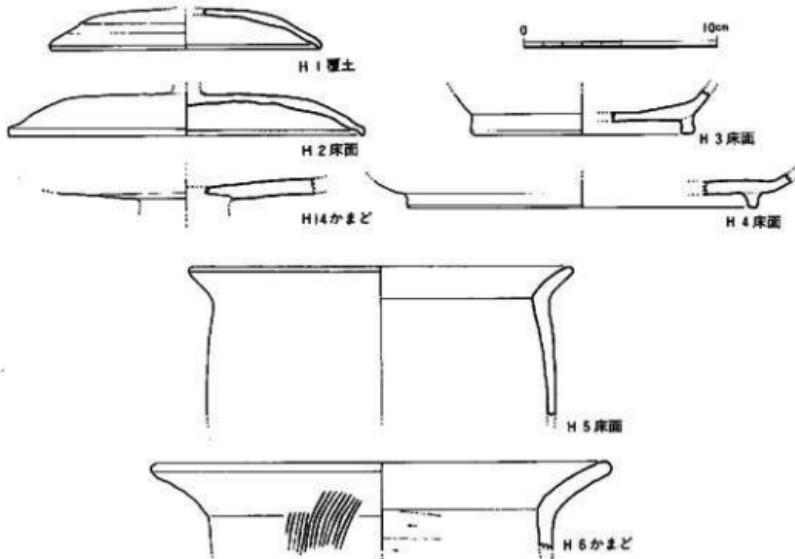
19 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

ない。Su8～11は有高台杯である。Su8は底部と体部の一部を残すのみで全形を知りえない。高台は体部との境からわずかに内側につき、外に開いてハ字形をなす。高台断面は、その外端部が小さく上方に突出しているために方形断面をなさない。Su9は底部と体部との境は明瞭で、微妙に渦曲しながらび、口縁部は丸くおさめている。口径は復原で14cm、高台径は9cmを測る。Su10の高台は外端部が上を向き背が低い。体部との境は丸みがあり、わずかに内湾しながらのびている。体部は内外面ともに横ナデ調整を加える。砂粒の少ない精良な胎土が用いられており、焼成もよい。Su11の体部は内湾ぎみにのび立ち上がりが強い。断面台形の高台は体部との境よりも内側につけられているが、背が低い。Su12～14は無高台杯である。Su12は底部のみの小破片で、体部との境は丸みがある。外底部は切り離しのままであるが内底部と体部内外面は横ナデ調整を施している。Su13は口径11.8cmの杯で、丸みのある底部から体部は緩やかにのび、口縁部でさらに小さく外反して丸くおさめている。器壁は薄く、調整も丁寧である。Su14はSu13よりもやや大きくなり径は13.6cmを測る。外底部は平坦で体部は内湾ぎみにのび、そのまま丸くおさめて口縁部をつくっている。Su15は皿で口径は16.6cmを測る。体部は直線的にのびている。口縁部は横ナデ調整。

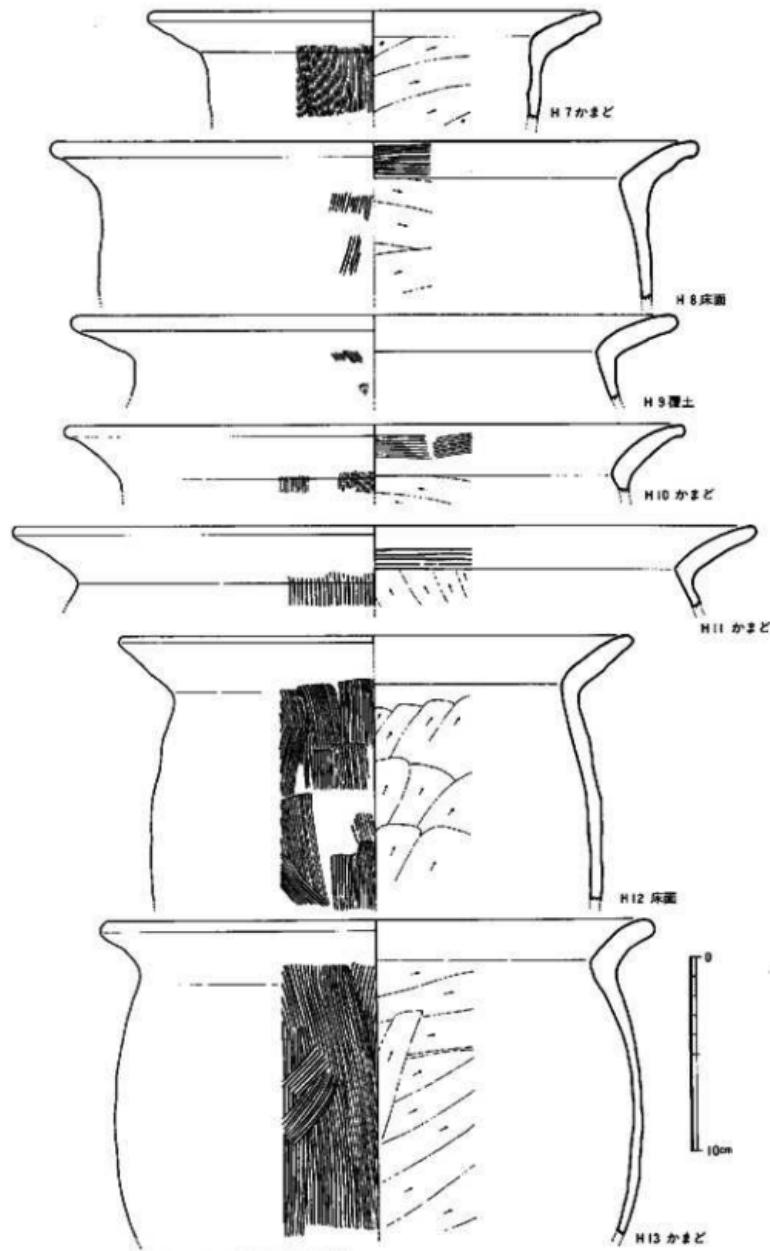
土師器 図示した点数は須恵器と同じ15点であるが、破片の出土量は土師器が須恵器よりも個体自体が大きいこともあって圧倒的に多い。図示した土師器のうち住居跡覆土からはH1、9の2点、床面からはH2、3、5、8、12の5点、かまどからはH4、6、7、10、11、13、14、15、16の8点が出土している。H1、2は杯蓋である。H1は14.2cmの口径で丸みのある天井部を持つ。口縁部は直角に小さく折り曲げている。口縁部の調整は横ナデ。H2はやや大きめの口径で18.1cmを測る。口縁端部は同じように小さく直角に折り曲げているが天井部はふくらみが小さい。天井部中心にはつまみの痕跡が見られる。内面の調整は磨耗が著しく不鮮明である。外面は横ナデ調整。H3、4は有高台杯で、いずれも体部の大部分を欠いている。H3の高台は断面長方形で、底部と体部との境に垂直に貼りつけられている。したがって境は明瞭な段をなさない。また高台端部は内外端ともに横ナデで丸みを持たせている。器面調整は内外面ともに磨滅しており観察できない。H4は19.4cmときわめて大きい高台を持つ。高台はほぼ垂直に貼りつけられており、断面は方形に近い形状をなす。小破片のために体部の長さがわからないがその傾きはにぶい。杯ではなく皿の可能性もある。H5～13の9点は甕で、口径の大小でH5、6、7とH8～13の2種類に分けられる。H5はく字型に外反する口縁部を持つ。体部の張りはない。H6は口縁部の小破片で、砂粒を含む胎土が用いられている。く字型の口縁部は、わずかに内湾しながらのび端部は丸くおさめている。屈曲部内面には、にぶい稜を持つ。口縁部内面は横ナデ調整。体部は張りがなくそのまま丸底の底部をつくるのであろう。体部内面は横方向のヘラ削り、外面は粗いハケ目を施す。口径は24cmを測る。H7も同じような口縁部を持つが

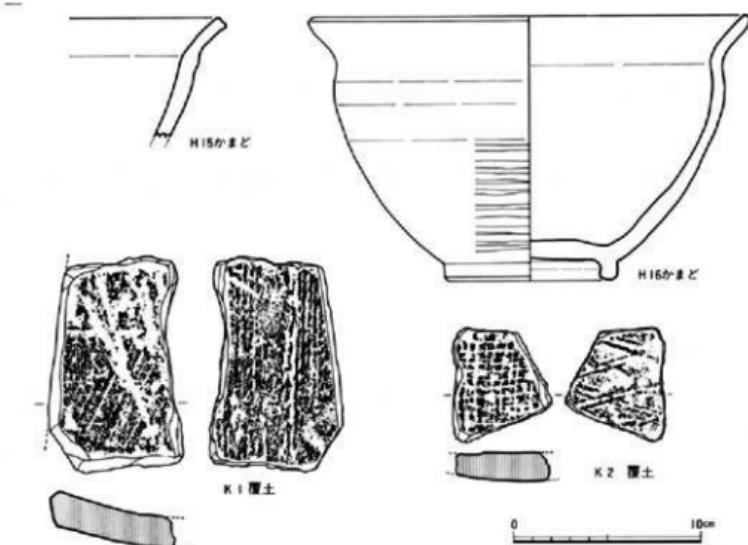
口縁部は直線的にのび、器壁も厚い。体部の調整も異り、外面は細かい縦のハケ目で、内面は右上がりのヘラ削りで粗雑なために凹凸が目立つ。H8~13の体部は張りを持っている。H8は器壁の厚い口縁部で、口径も33.8cmと大きい。口縁部の内面は粗い横ハケ目を加えている。H9は覆土より出土したもので、H8と同じような口縁部であるが、上面はふくらみ、内傾度も弱い。屈曲部内面の稜も鋭くない。H10は32.4cmの口径で、屈曲部内部はシャープな稜をなす。調整は体部内面に細かい縦ハケ目、内面に横方向のヘラ削り、II縁部内面の粗いハケ目後にII縁部にはさらに横ナデを加えている。H11は39.6cmと最も大きい口径の甕である。体部上半部は内傾が強く、口縁部は直線的に外反する。H10、11ともに体部外面には煤が付着している。H12とH13はともに底部を欠いている。H12は体部中位から頸部にかけてわずかに内傾し、く字型に外反する。体部外面のハケ目は粗いが全面に施している。H13の体部にはさらに張りがあり、最大径は中位よりやや上にある。II縁部の器壁はきわめて厚く、かつ短いつくりをなす。体部内面のヘラ削りは横と縦の二方向を繰り返すなど調整は全体的に丁寧である。H14は高杯の小破片で脚部との接合部で剥離している。H16は有高台の鉢でかまと袖に乗って出土した。II径は24cm、高台径は9.4cmを測る。H15も同じように鉢のII縁部であろう。

瓦 覆土より2点の瓦片が出土した。K1、2ともに瓦片で、K1は布目压痕と繩目叩きが観察できる。側縁はヘラ切り後に面取りをしている。K2には、斜格子の叩きが見られる。

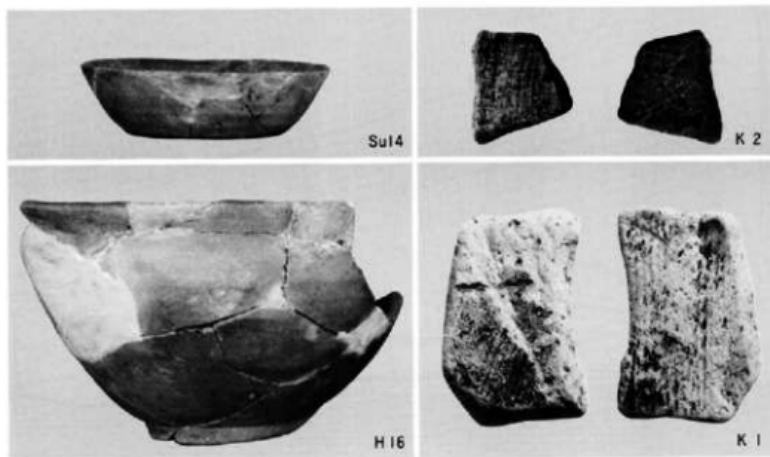


20 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)





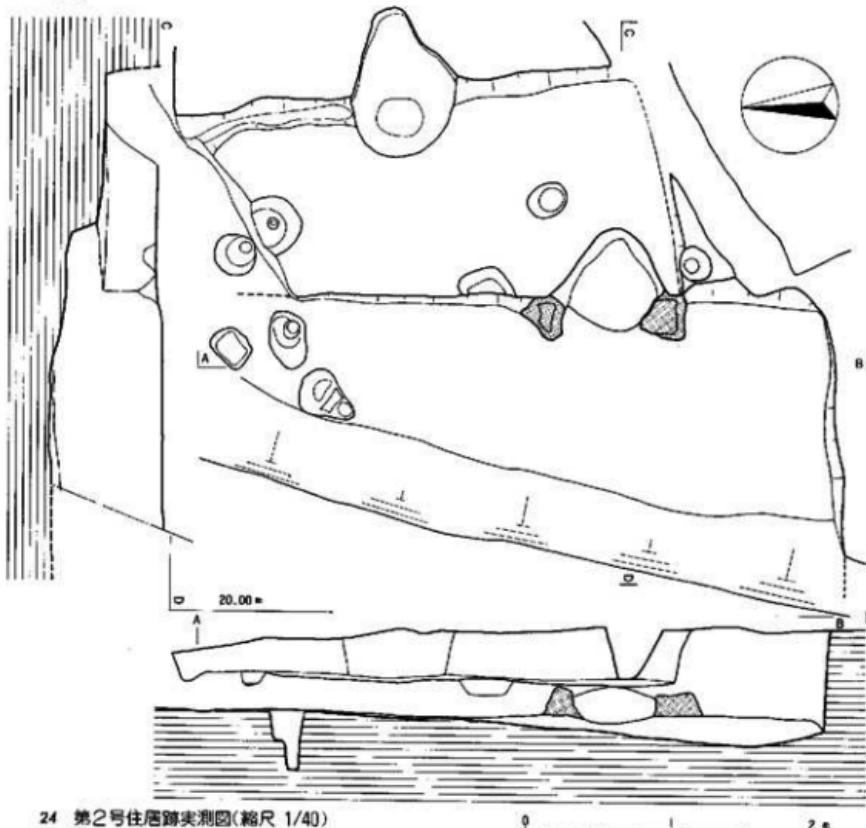
22 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)



23 第1号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

第2号住居跡 (24~30)

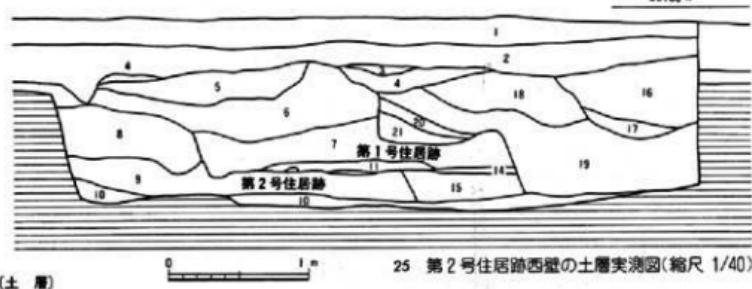
第2号住居跡は第1号住居跡に切られており、第1号住居跡より先に営まれた方形プランの住居跡である。住居跡の中心軸は、二つの住居跡ともほぼ同じである。壁は、東壁と南壁の2壁しか残っておらず、どちらもその一部である。現在の長さは東壁が360cm、南壁が180cmを測る。東壁は第1号住居跡より削平されているために23cmの高さとなっているが、南壁は垂直に掘りこまれており75cmと高い壁になっている。床面は凹凸が目立ち、しかも南壁側に緩やかに傾斜しており、その差は14cmを測る。床面は地山まで掘り下げて柱穴の検索を行なったが、1個も確認できなかった。壁溝は、東、南壁とも認められていない。かまどは、東壁のやや南に寄った位置にある。挿図25は、西壁の土層実測図であるが、北壁は擾乱のために確認できなかった。



24 第2号住居跡実測図(縮尺 1/40)

かまど 上部に第1号住居跡が重なっているために大部分が失われている。東、南壁とのコーナーから北に140cmの位置に築かれている。灰色粘土の両袖は残っているものの、わずかに25cmの長さである。橢円形に壁外に掘りこまれているが、第1号住居跡の張り床と同じ土が入っており、第1号住居跡の構築に際して完全に破壊されたらしく煙道などは確認できなかった。

20.60m



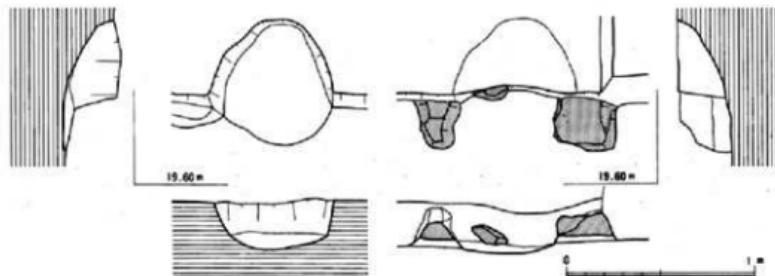
25 第2号住居跡西壁の土層実測図(縮尺 1/40)

(土層)

1 マサ土(整地層)	8 茶色土	茶色土が多い。土器片少ない。	15 黒茶褐色土	1号住のピットではない。
2 黒色土 砂礫まじり。	9 茶褐色土	粘着力が強い。	16 黒褐色土	
3 粘質茶色土 ブロック状にうすく入る。	10 黒褐色土	2号住の張り床か	17 茶色土	炭化的瓦片。
4 茶褐色土 砂、焼土が多い。	11 黒褐色土	薄みをおびる。	18 茶色土	炭化的瓦片
5 深褐色土 わずかに土器片入る。	12 淡茶褐色土	土器片が多い。	19 黑褐色土	茶色土が多く入る。
6 黒色土 土器片入る。	13 茶色土	3層に似て粘着力あり。	20 茶褐色土	茶色土がさらに多い。
7 黑褐色土 1号住の覆土。土器片多い。	14 茶色土	粘着力が強い。	21 黑色土	下部に砂を含む。



26 第2号住居跡



27 第2号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)

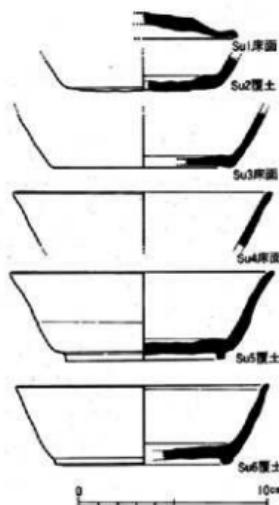


28 第2号住居跡かまど



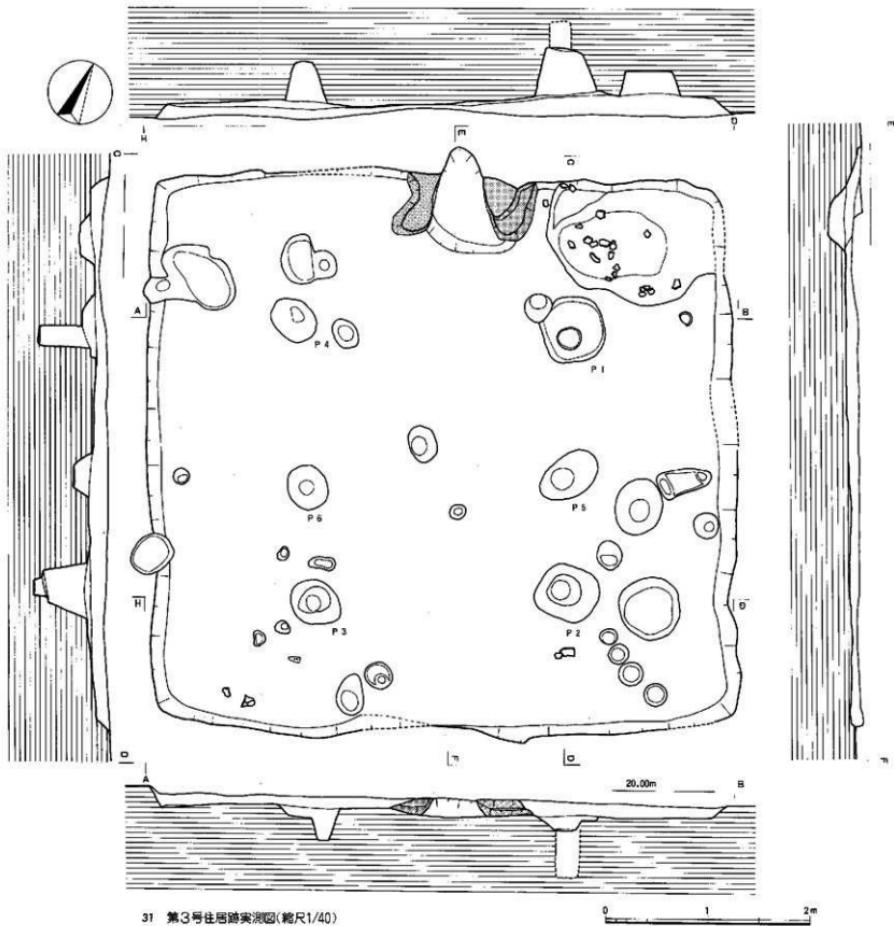
29 第2号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

出土遺物 (29, 30)



出土遺物は、覆土、床面ともきわめて少なく、図示したのは須恵器の6点にすぎない。Su 1、3、4、5は床面から、Su 2、6は覆土からの出土で、Su 5は床面と覆土出土の破片が接合した。Su 1は杯蓋の小破片で口徑は不明。端部の折り曲げは小さい。Su 2、3は無高台杯で、体部はわずかに内湾ぎみにのびている。底部との境はSu 3が稜を持つのに対し、Su 2は丸みがある。Su 4の杯口縁部は、体部から直線的にのびそのまま丸くおさめる。Su 5、6は有高台杯である。Su 5のハ字形に開く高台は体部との境より内側に貼りつけており、体部は外湾ぎみにのびる。Su 6の高台は低く、体部は内湾ぎみにのび、口縁端部はさらに小さく外反する。

◆ 30 第2号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)



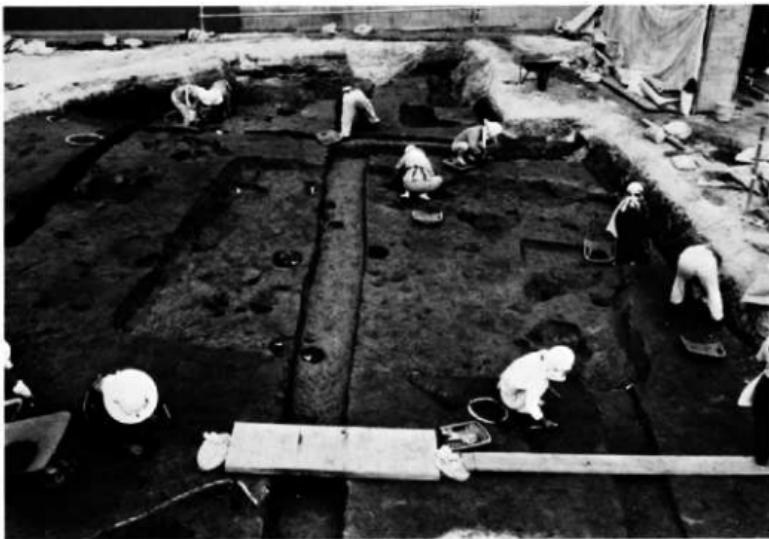
31 第3号住居跡実測図(縮尺1/40)

第3号住居跡 (33~41)

第3号住居跡は、第1号住居跡の南西約1.5mの位置にある。那珂土木事務所の基礎で住居跡の中央部などが破壊されてはいるが、本遺跡では最も大型で全形を知りうる住居跡である。住居跡の中心軸はN-23°Wである。かまどのある北壁は550cm、南壁は560cm、東壁は535cm、西壁は530cmの長さで、南北壁がわずかに長い方形プランを呈している。各コーナーは、直角ではなく丸みを持っており、各壁とも直線ではなく出入りが見られる。壁は斜めに掘りこまれており、垂直な壁をなしていない。壁高は遺存状態のよい南東コーナーで20cmを測るにすぎず、後世に削平されたのであろう。壁溝は各壁とも認められない。床面は、ほぼ平坦で、全面に5cm前後の厚さで張り床がなされている。床面には大小のピットがあるが、P1~4を主柱穴とする4本柱構造と推測される。またP5、6も柱列にあることから建て替え、あるいは別の構造も考えられる。



32 第3号住居跡遺物出土状況



33 第3号住居跡発見作業風景

22 第3号住居跡

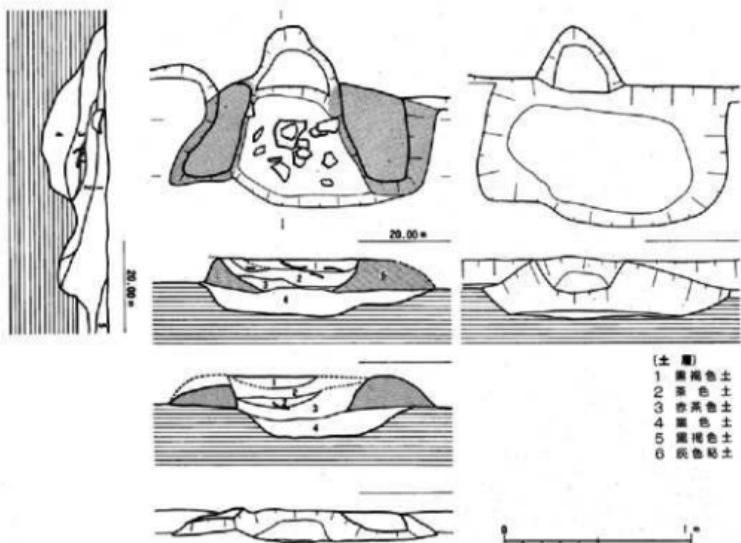


34 第3号住居跡(南西から)



35 第3号住居跡(西から)

かまど 北壁のほぼ中央に築かれている。かまどは挿図37のように、まずかまど設置場所の壁内側に90×50cmの楕円形ピットを掘りこみ、この上に灰色粘土で両袖を作っている。ピットは炭まじりの黒色土が埋っておりかまど構築時に祭祀的な行為があったことが推測される。かまどの手前側には、使用中にできたと思われる窪みがあり炭、焼土が見られた。



36 第3号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)

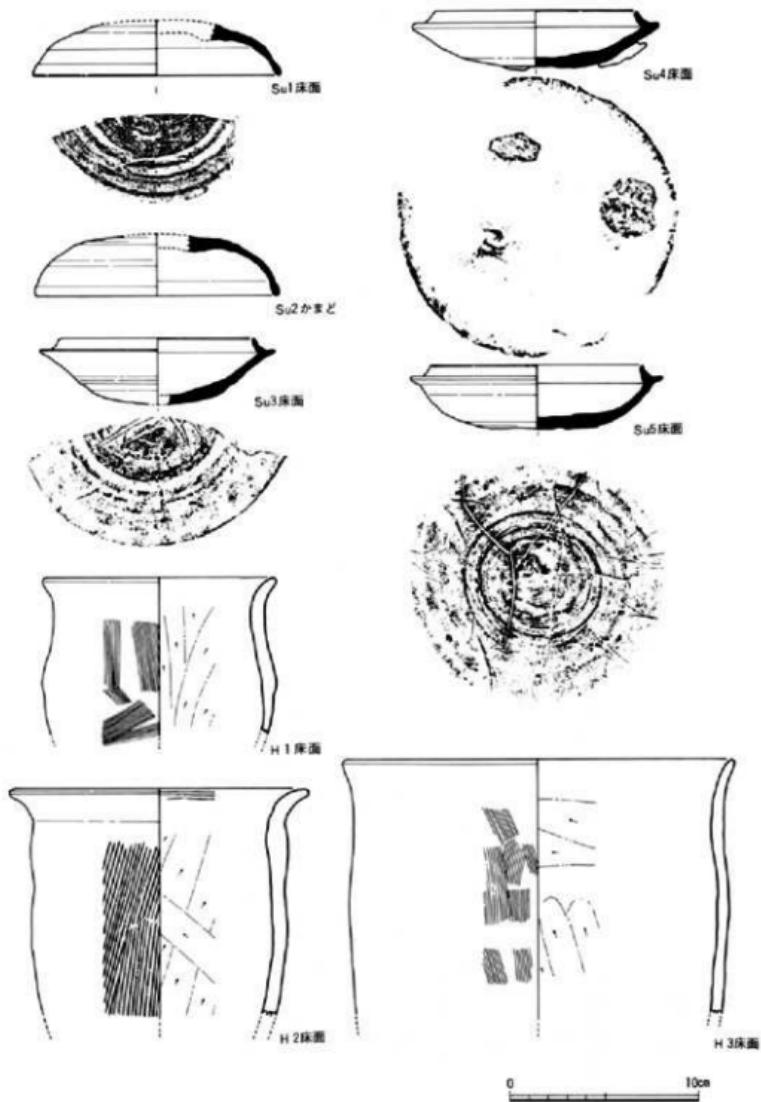


37 第3号住居跡かまど(南西から)



38 第3号住居跡かまど(西から)

24 第3号住居跡の遺物



39 第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

出土遺物 (39~41)

住居跡上部が削平されていることもあって覆土からの出土遺物は少なく、床面からの出土も多くはない。図示したのは須恵器5点と土師器4点の計9点にすぎない。ただかまとその周辺には遺物が集中して出土した。また石製穂摘具は覆土ではなく床面直上からの出土である。

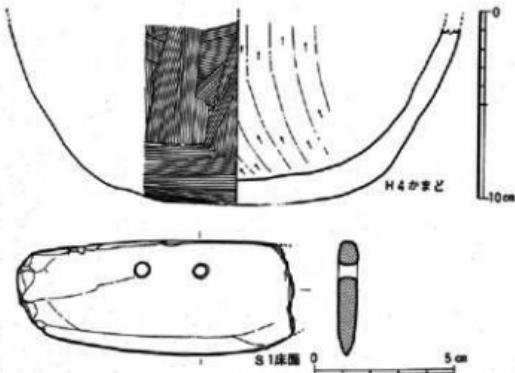
須恵器 Su1、2は杯蓋の小破片である。Su1はかまと東側の土括より出土、Su2はかまと袖粘土下より出土した。Su1、2とも天井部は丸く、ヘラ記号がある。Su3~5は杯身で、Su4、5は完成品である。3点ともたちあがりの内傾が強く、底部にはヘラ記号がある。Su4は口径11.4cm、器高は3.4cmを測る。

底部のヘラ削りは1/2以下で、受部は小さく、先端は丸くおさめている。

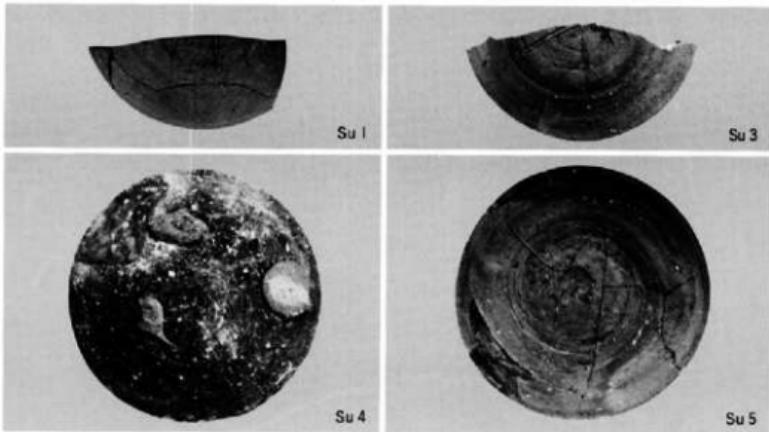
土師器 小型甕と大型甕の底部

4点を図示した。H1~3は同じような器形をなす。長めの体部には張りがなく、そのままのびて小さく外湾する短い口縁部がつく。H4は丸底の器壁の厚い破片で、外面は粗いハケ目、内面は継のヘラ削りである。

石器 S1は輝緑凝灰岩製の石庖丁で、刃部は湾曲せず直線的である。



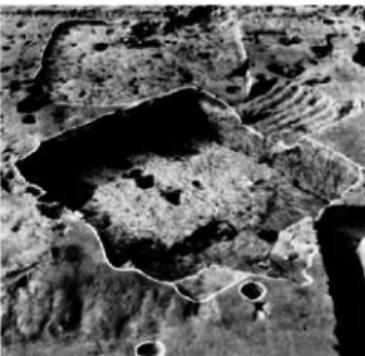
40 第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3 1/2)



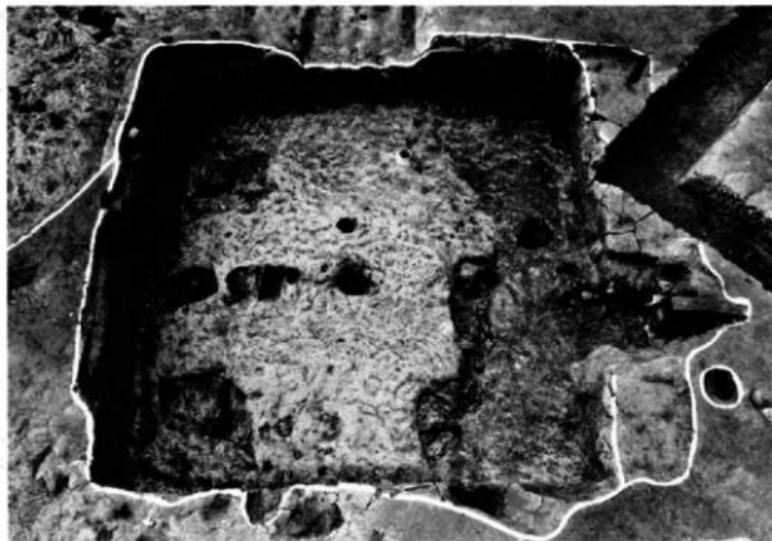
41 第3号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

第4号住居跡（42～50）

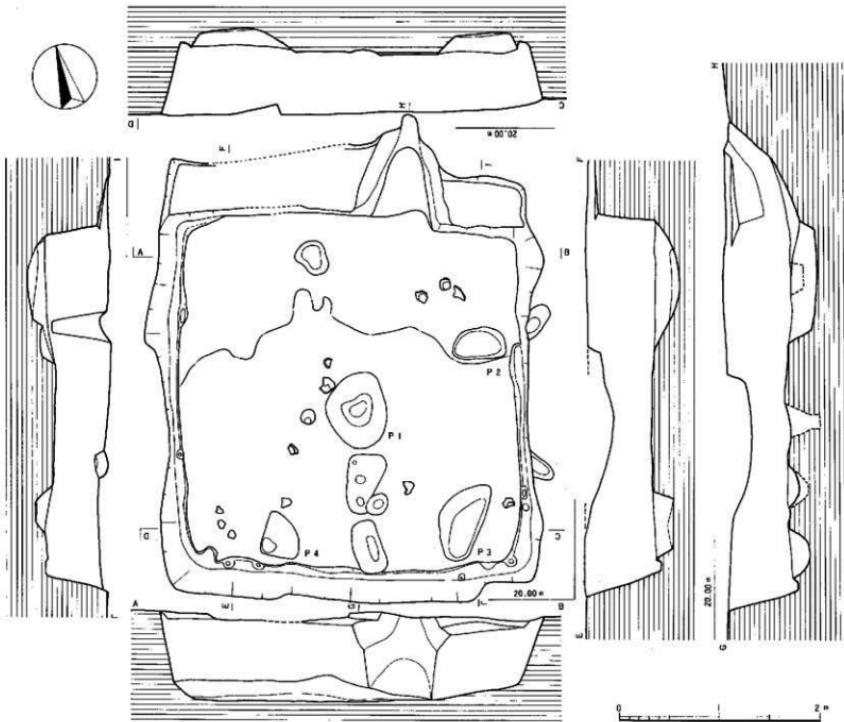
発掘区の中央より北に寄った所で検出したもので、第3号住居跡より南に2.1mの位置にある。かまどのある北壁の一部が基礎で破壊されているものの本遺跡では最も遺存状態がよい。壁長は北壁が350cm、南壁が360cm、東壁が360cm、西壁が370cmの、正方形に近い平面プランで、各コーナーともに隅丸ではなく直角となっている。北壁にそって50cmの張り出しがある。この張り出し部は深い所で10cmを測り、別の住居跡が重複しているのではなく、第4号住居跡の外部施設と考えた。各壁は垂直ではないが、いずれも70cm前後の高さである。床面には張り床が見られるが、北壁寄りは地山が約90cmの幅で一段と深く掘りこまれている。住居内に数個の柱穴を検出したが、主柱穴はP1を中心とするP2～4であろうか。壁溝は東、西、南の3壁に見られるが、北壁側は張り床のために不明瞭で確認できなかった。



42 第4号住居跡

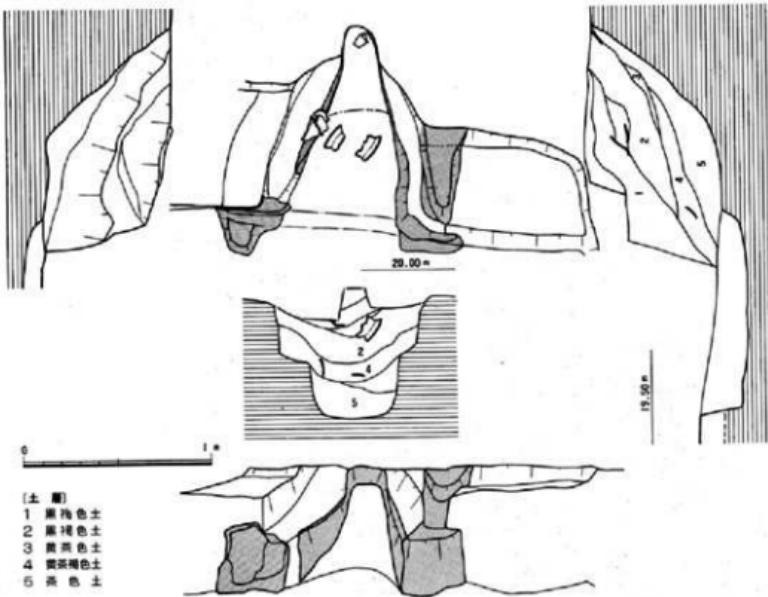


43 第4号住居跡



44 第4号住居跡実測図（縮尺1/40）

かまど きわめて遺存状態のよいかまどで、北壁の中心より南に偏した位置に築かれている。張り床をして北壁の外側に向かって三角形に緩やかに掘りこみ、張り出し部から壁にかけて灰色粘土を乗せてハ字形の袖を作っている。かまど本来が外側に出ているために住居空間での占める面積を最少限度にとどめる結果となっている。



45 第4号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)



46 第4号住居跡かまど

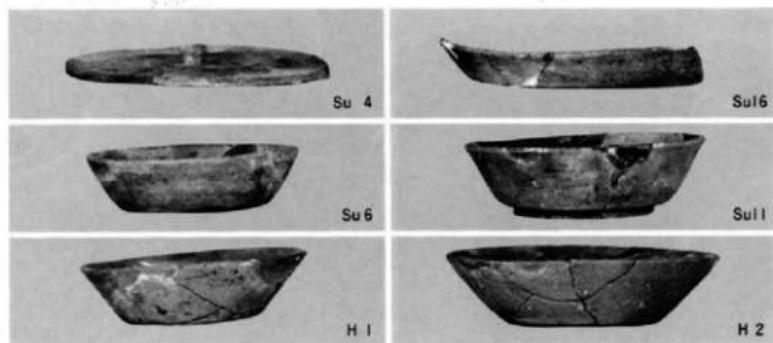


47 第4号住居跡かまど

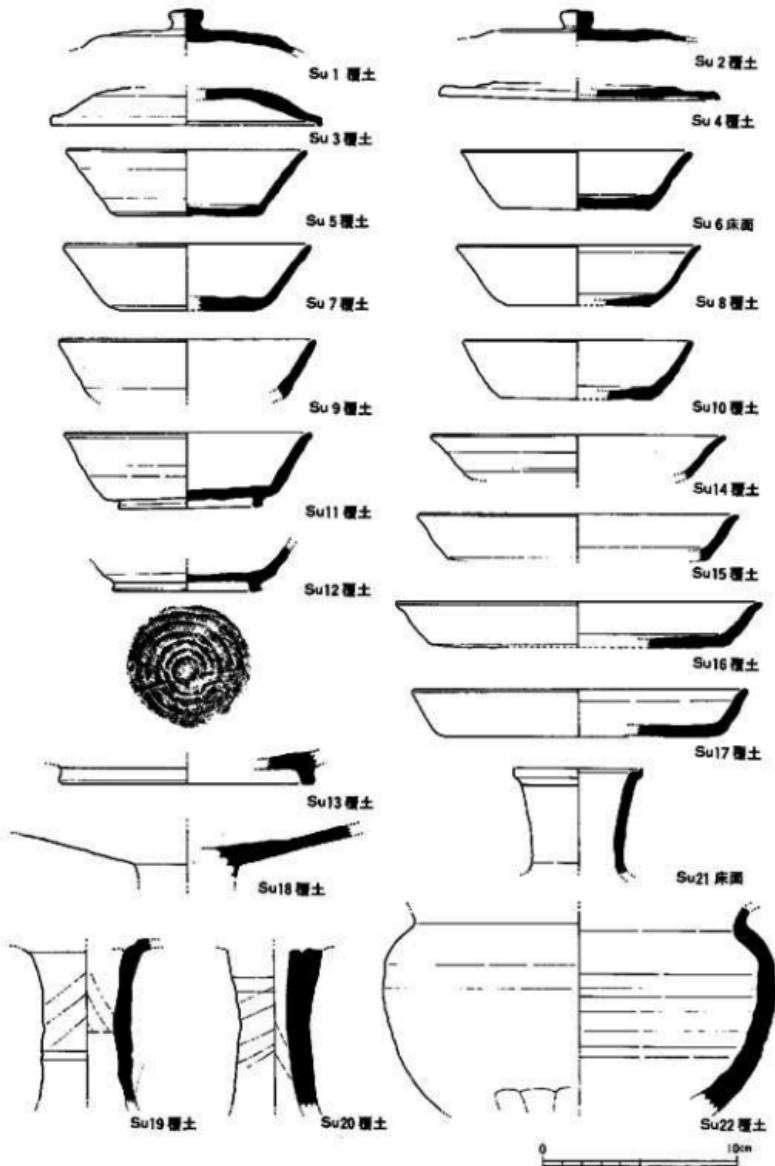
出土遺物 (48~50)

住居跡の掘りこみが深く、かつ上部削平の影響も弱いことから、覆土が厚く堆積しており、遺物の出土も多かった。床面では中央より西壁にかけて散乱した状況で出土した。これらのうち29点を図示した。Su 6, 21, H 1, 2が床面、H 4~6はかまどより出土した。

須恵器 Su 1~4は杯蓋で、完形品はない。Su 1の天井部はわずかにふくらみがあり、小さなつまみを持つ。Su 2も同じようなつまみを持つが、天井部はさらに平坦になる。外面は横ナデ、内面はナデ調整。Su 3は口径14cm、口縁部は直角に小さく折り曲げる。Su 4はまったくふくらみがなく偏平な器形をなす。つまみの接合痕があるが中心より離れている。口径は15cm。Su 5~10は無高台杯で、Su 5は口径13.6cm、底径7.6cm、器高3.4cmを測る。胎土は砂粒を多く含んでいる。体部の立ち上がりは他に比べ弱く、直線的にのびるが口縁部近くで小さく外反する特徴を持つ。Su 7の底部は切り離しのままでナデを加えていない。Su 9、10の体部は丸く外湾ぎみにのびており、器壁も他より厚い。Su 11~13は有高台杯である。3点とも体部との境近くに高台を貼りつけている。Su 12の底部は、粘土紐のまきあげ難目がよく残っている。Su 14~17は口径15.2~19.2cmの皿である。Su 14は器壁の薄いつくりで、体部の傾きも Su 15~17と異なる。Su 15~17の体部は立ち上りで、口縁部は小さく外反する。Su 16の底部は切り離し後にナデ調整。Su 18~20は同じように高杯の破片である。Su 18は杯部で、精良な胎土が用いられている。杯部内面は横ナデ後にさらにナデ調整をしている。Su 19、20は脚筒部で、杯部接合部から剥離している。Su 19は脚筒部中位に1条の浅い沈線が巡る。剥離面の観察によると Su 19、20とでは杯部の接合法は異なるようである。Su 21、22は蓋の口縁部で、口縁部は水平に折れざらに小さく直立している。Su 22は精良な胎土が用いられた広口壺である。体部上半の内傾は弱く、反転して小さな口縁部をつくる。

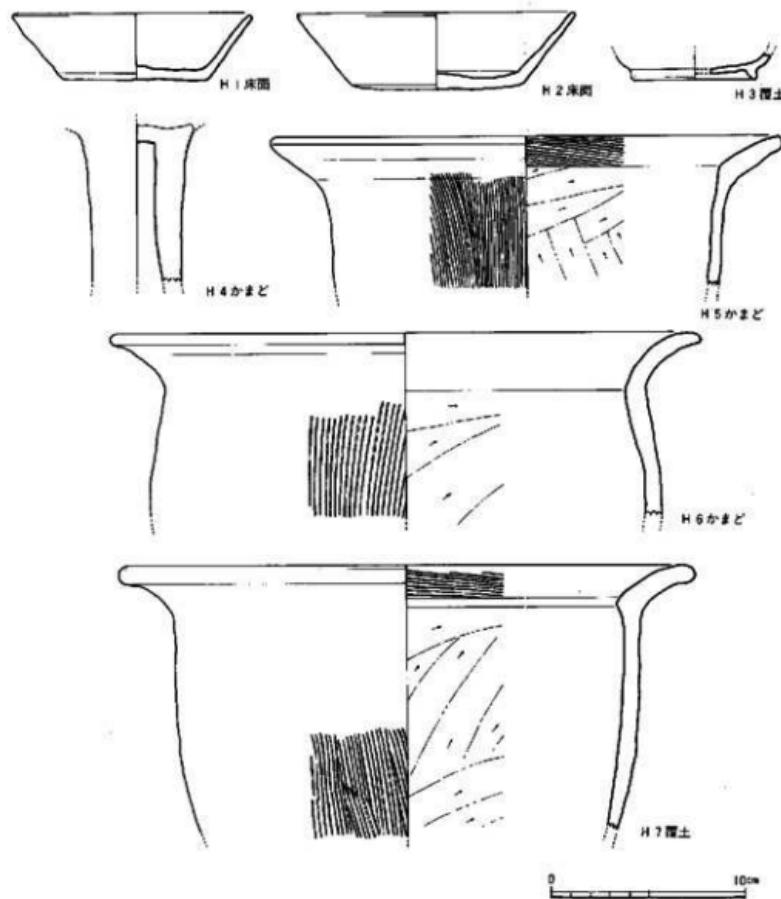


48 第4号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

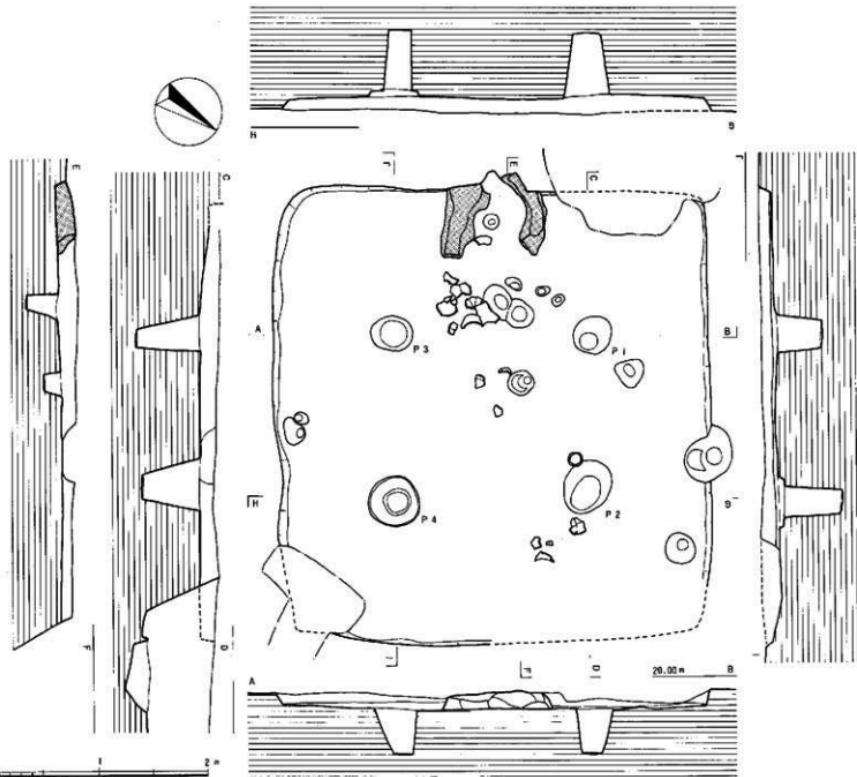


30 第4号住居跡の遺物

土師器 H1、2は無高台杯で、よく器形は類似している。H1は口径12.5cm、底径7.4cm、器高3.3cmの法量である。胎土には小砂粒が多く含まれている。H2は一回り大きい。体部は直線的に外反している。H3は有高台杯で体部の境は丸みを持つ。全体が磨耗しており調整痕は残っていない。H4は高杯の脚筒部で、外面は丁寧な横ナデ調整がなされている。H5～7は甕の上半部である。H5の口径は26.6cmで、く字形、口縁部は器壁が厚く直線的に外反している。H6、7のく字形口縁部上面は上方に滴曲している。H6の体部には、わずかながら張りがあり、口縁部は長いつくりである。いずれも体部外面は粗いハケ目、内面は右上りのヘラ削り。



50 第4号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)



51 第5号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第5号住居跡 (52~59)

第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡の中間に位置しており、東壁の一部が第4号住居跡によって切られている。三つのコーナーが破壊されているが各壁の推定全長は、かまどのある西壁が370cm、東壁が360cm、北壁が390cm、南壁が390cmを測る。残っている南コーナーは直角ではなく丸みがあることから隅丸方形プランの住居跡と言うことができる。しかし各壁の遺存状態はきわめて悪く、壁の高さは18cm以下である。床面は、ほぼ水平で、この上に薄く張り床をしている。住居内には大小10数個のピットがあるが、これらのうちP1は41cm、P2は58cm、P3は61cm、P4は53cmと他に比べ深いことや、これらが各コーナーとの対角線上に位置していることなどから主柱穴と考えられる。これらの間隔はP1とP2が146cm、P2とP4が175cm、P3とP4が148cm、P4とP1が175cmを測る。遺物はかまと付近で多く出土している。

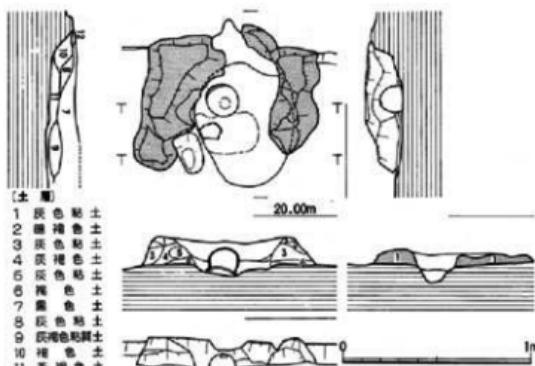


52 第5号住居跡



53 第5号住居跡

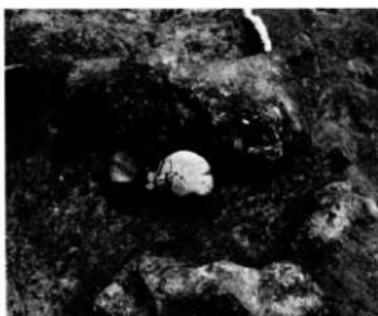
かまど かまどは西壁の中央に位置している。上部が削平されているために、遺存状態はきわめて悪い。袖は灰色粘土で築かれており、壁に向かって左側の袖の長さは70cmを測る。右袖は残りが悪く55cmの長さである。壁外側への掘りこみは25cmと短いが、これは壁が本来の高さでないためであろう。



54 第5号住居跡かまど実測図(縮尺 1/30)



55 第5号住居跡かまど



56 第5号住居跡かまど

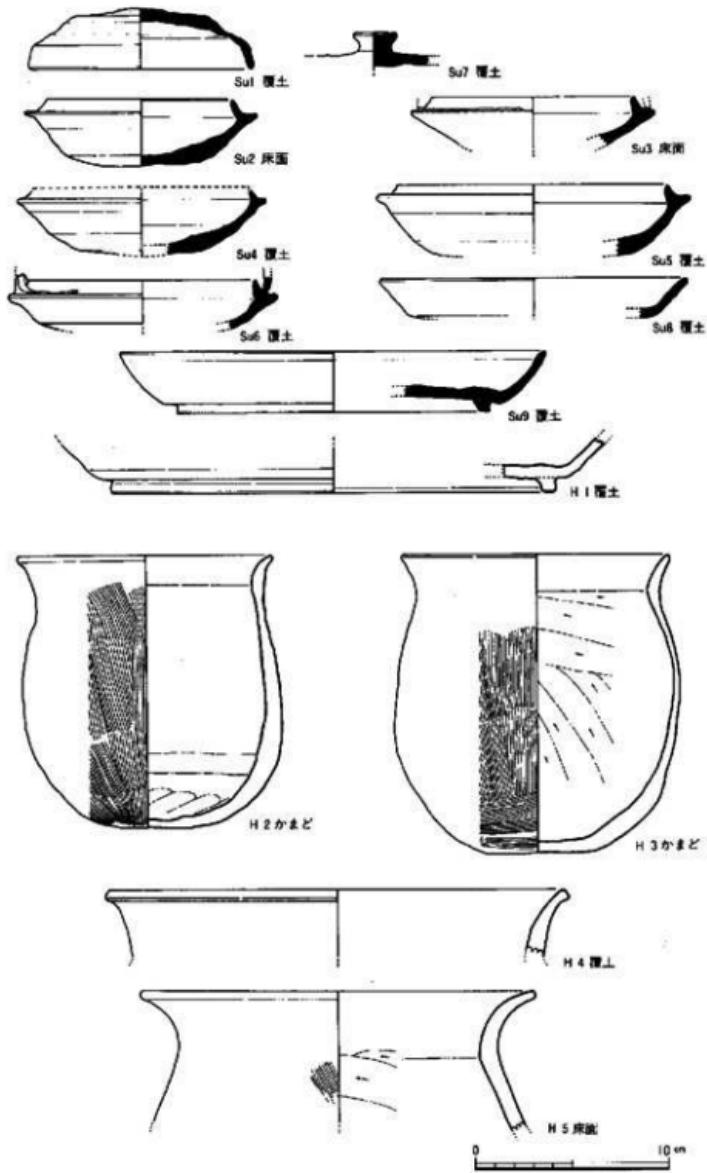


H 2



H 3

57 第5号住居跡出土遺物(縮尺 1/3)

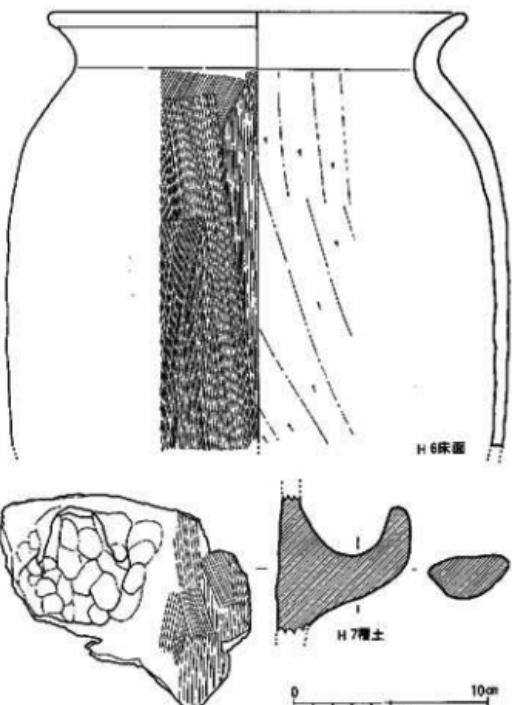


58 第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

出土遺物 (57~59)

須恵器と土師器が出土したが量的には決して多くない。それは上部が削平されているためであろう。出土遺物には時期的な差があるが、新しい時期の遺物のはほとんどは覆土より出土している。

須恵器 Su1は杯蓋で口径は11.8cm。天井部のヘラ削りは1/3以下である。Su2~6は杯身でたちあがり部の内傾は大きく、受部とも小さい。Su3と6は受部に蓋の口縁部が焼成時に付着している。Su5は同じようなつくりの受部を持つが、口径は14.2cmと大きくなっている。Su8は皿で、Su9のような高台はつかないであろう。Su9は有高台皿で、口径22.4cmを測る。高台は



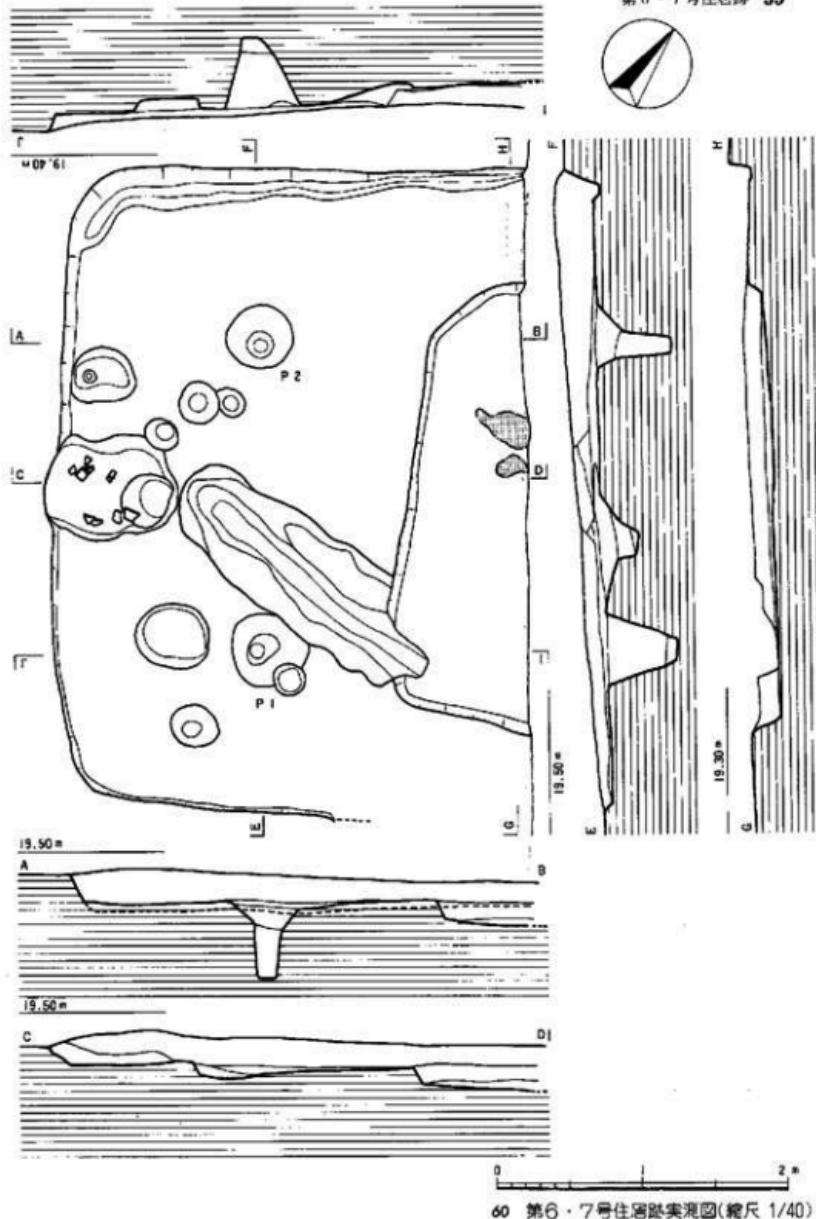
59 第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)

体部との境よりも5mm内外に貼り付け横ナデを加えている。体部内外面とも横ナデ調整。

土師器 H1な高台径23cmと大きい有高台皿で、Su9と同じように体部との境より内側に高台が付く。H2、3は小型の甕で丸底をなす。H2はかまどに伏せた状態で出土した。口縁部は小さく外反する。体部は細かいハケ目調整。内面は指押えで整形したのか凹凸が目立つ。H4~6は甕の破片である。H6はかまどの前面で押し潰れた状態で出土した。体部には張りがなく長くのび、上半部で大きく内傾し、口縁部は外反している。口縁部の器壁は厚い。H7は甕の把手である。把手は器壁に入れこみ、指で押えて接合している。断面は逆三角形状をなす。

第6・7号住居跡 (60~66)

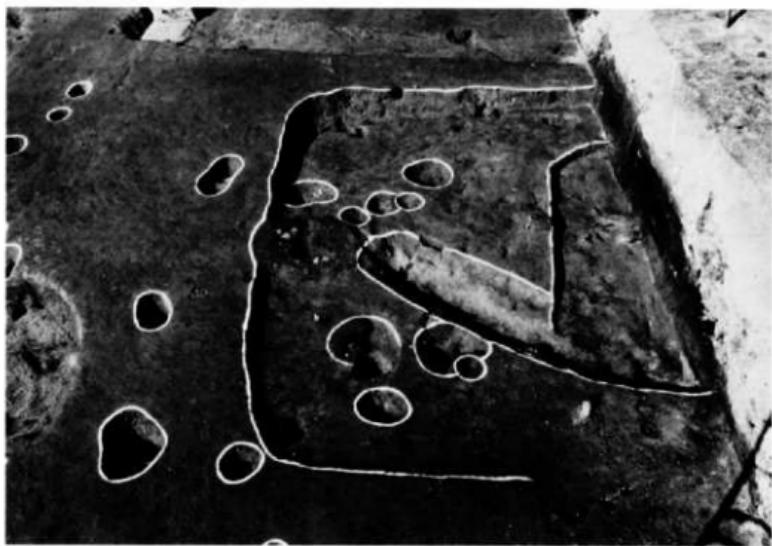
第6・7号住居跡は、発掘区の南寄りで検出したもので、第4号住居跡からは東南へ13mの位置にある。二つの住居跡は重複し東壁土層の観察では第7号住居跡が新しい。第6号住居跡の壁長は西壁だけが完全で、400cmを測る。床面は東に向かってわずかながら傾斜している。



36 第6·7号住居跡



61 第6·7号住居跡



62 第6·7号住居跡

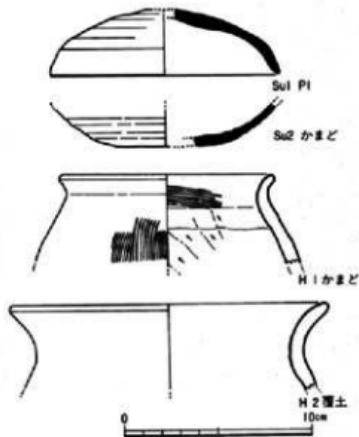
壁溝は北壁のみに認められる。主柱穴は西壁と並行にあるP1、2であろう。これらの間隔は215cmを測る。4本柱で柱間距離を等間隔とすれば、他の2つの柱穴は発掘区域外に出てしまうことになる。第7号住居跡は、かまどの位置がわからないが、検出した西壁の方向は第6号住居跡の西壁とほぼ並行している。西壁の長さは270cmを測る。現在の地山は南東方向に傾いているが床面は水平である。床面には柱穴、壁溝とも見られない。

かまど 第6号住居跡のかまどは西壁に築かれている。遺存状態はきわめて悪く、粘土ではなく焼土混じりの暗赤褐色土が楕円形に盛り上がりっているだけである。この上部より数点の土器片が出土した。

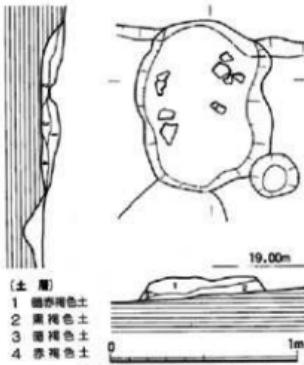
出土遺物

須恵器 Su1はP1より出土した杯蓋で口径は12.4cmを測る。Su2は杯身としたが小破片のため不明。底部のヘラ削りはない。かまど出土。

土師器 H1はかまどより出土した小型の甕。H2の甕は第7号住居跡の覆土より出土した。



66 第6・7号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)

63 第6号住居跡かまど実測図
(縮尺1/30)

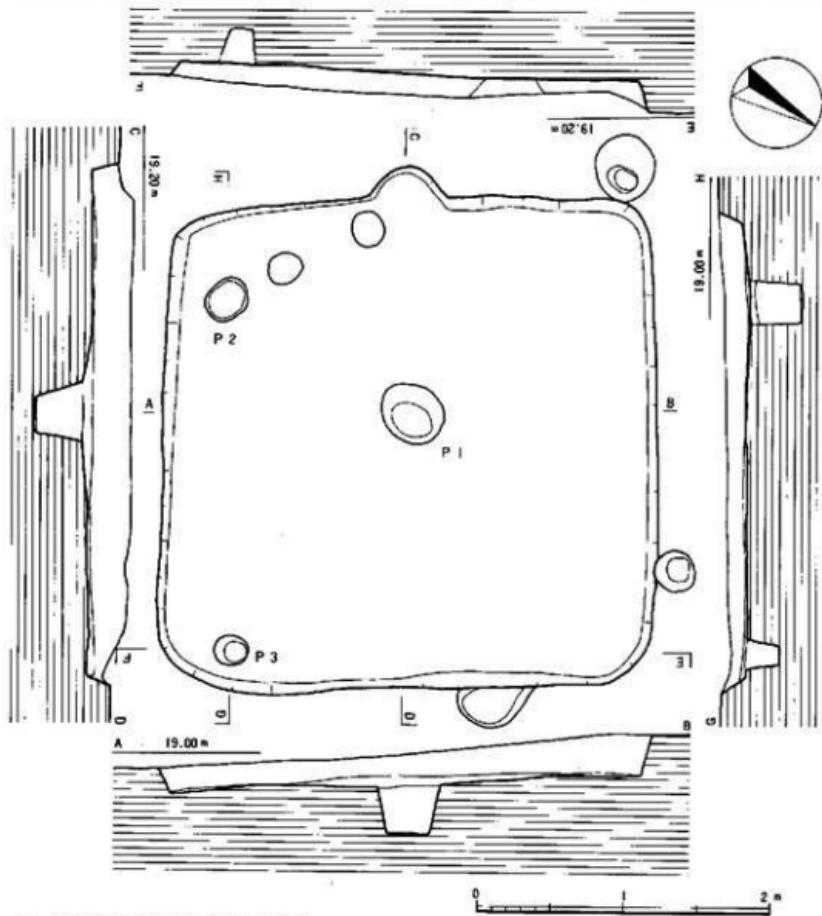
64 第6号住居跡かまど



65 第6号住居跡かまど

第8号住居跡

第8号住居跡は発掘区の南端部にあり、第6号住居跡の南3mの所に位置している。上部は削平されてはいるものの4壁が完全に残っている。かまどのある西壁は315m、東壁は310m、北壁は313m、南壁は308cmの長さで正方形に近いプランをなす。各コーナーは丸みを持っていて、床面は現地山面の傾斜と同じように南西側に傾いて掘りこまれている。住居跡内には、5個のピットがあるが中央のP1と各コーナーに配されたP2、3が主柱穴であろう。しかし北東と北西コーナーでは精査したが検出できなかった。壁溝はなく、遺物もきわめて少なかった。

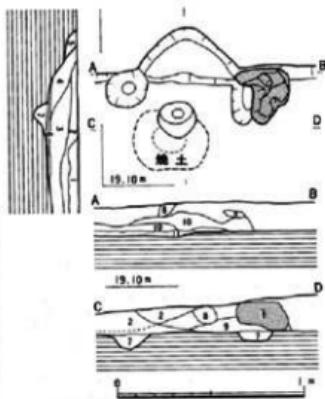


67 第8号住居跡実測図(縮尺 1/40)

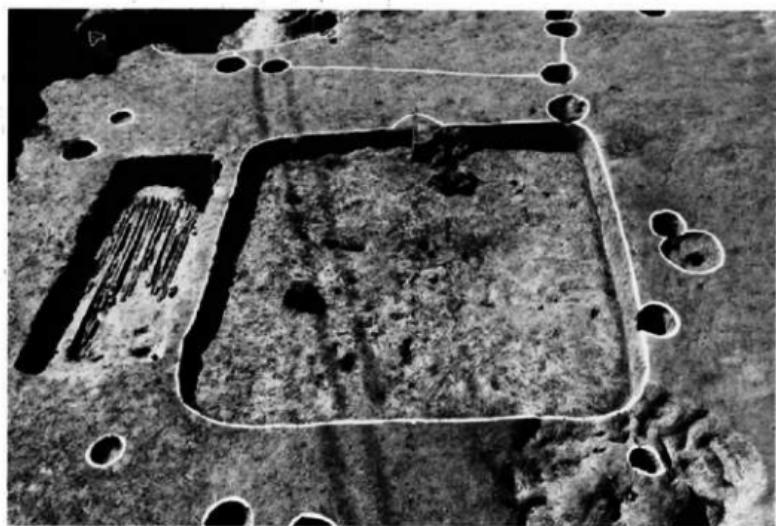
かまど かまどが築かれている西壁の高さが20cmも残っていないので、袖に使われている灰色粘土も右袖のみに見られるだけである。両袖の下には小ピットがある。住居跡外に三角形に掘りこみがあり、その深さは8cmを測る。



69 第8号住居跡かまど

68 第8号住居跡かまど実測図
(縮尺 1/30)

[土 壤]	
1 黒褐色土	7 極色土
2 灰褐色土	8 灰白色粘土
3 质白色土	9 高褐色土
4 灰灰色土	10 灰白色粘土
5 褐色土	11 極色土
6 褐色土	

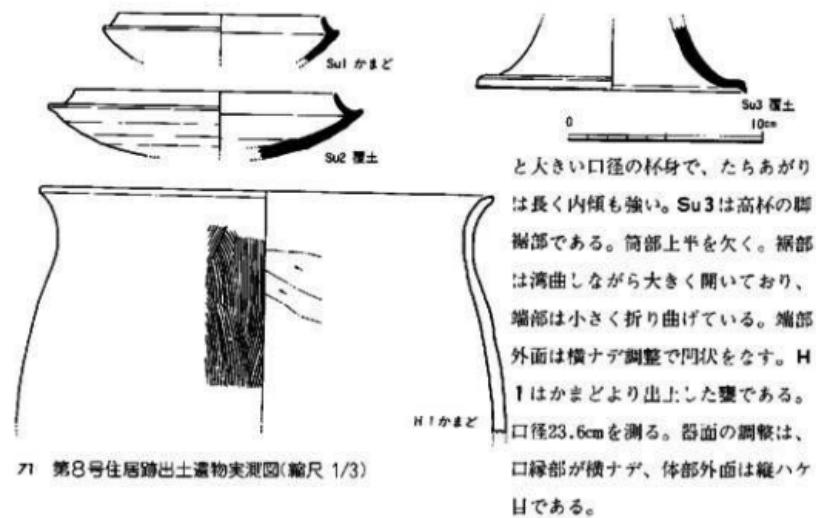


70 第8号住居跡

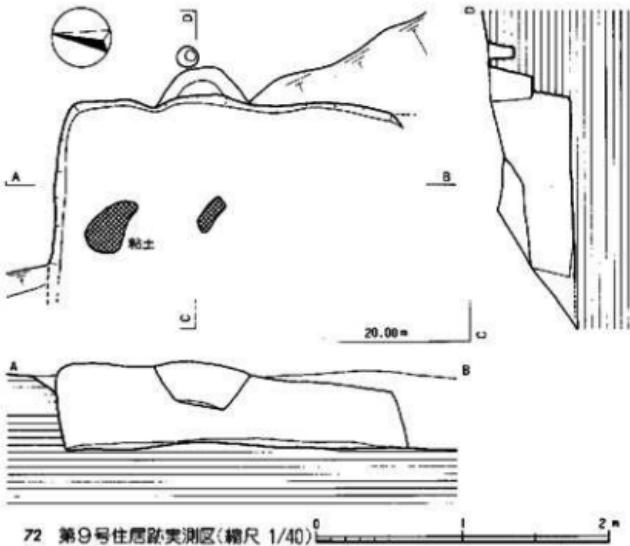
出土遺物 (71)

小破片でも図化するように努めたが図示したのは4点にすぎない。これらのうちSu1とH1がかまとから出土。Su2、3は覆土出土である。

須恵器 Su1は杯身で口径は10.6cmを測る。受部は小さく、たらあがりも短い。Su2は12cm



71 第8号住居跡出土遺物実測図(縮尺 1/3)

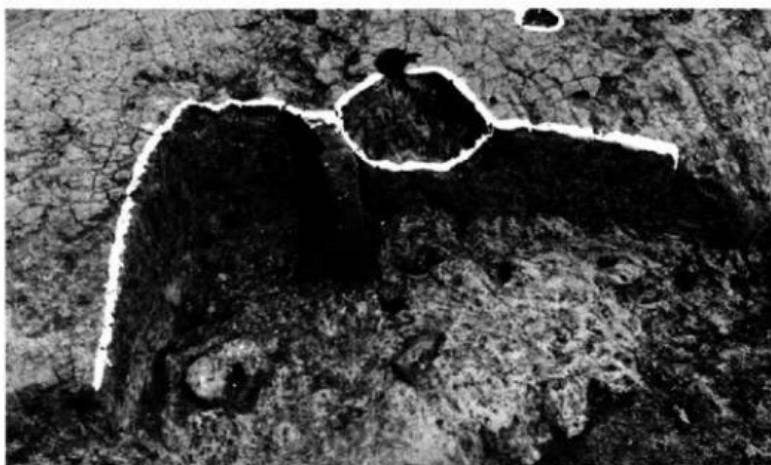


第9号住居跡

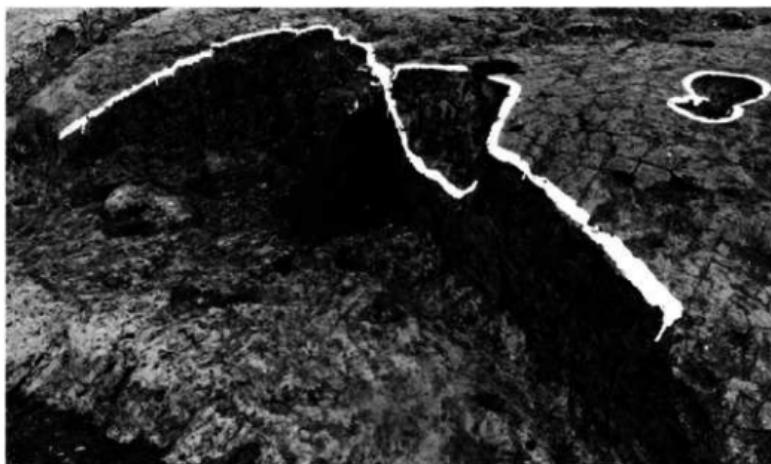
(72~74)

発掘区の西側部は隣接地との境界に沿って地山が大きく削られて排水溝やブロック塀が作られており、1m近い段差ができる。第9号住居跡は、この崖面にある。発掘では住居跡のコーナー部を検出したにすぎない。各壁の検出長は北壁

が110cm、東壁が220cmである。壁はコーナー部で30cmあり、壁自体は今回検出した9基の住居跡のうちでは残りのよい住居跡に入るであろう。床面は水平をなす。床面には2か所に灰色粘土が見られただけで遺物の出土も皆無であった。したがって第9号住居跡の時期を知りうる遺物はない。住居跡の方向としては第1、2号住居跡の方向に近い。



73 第9号住居跡

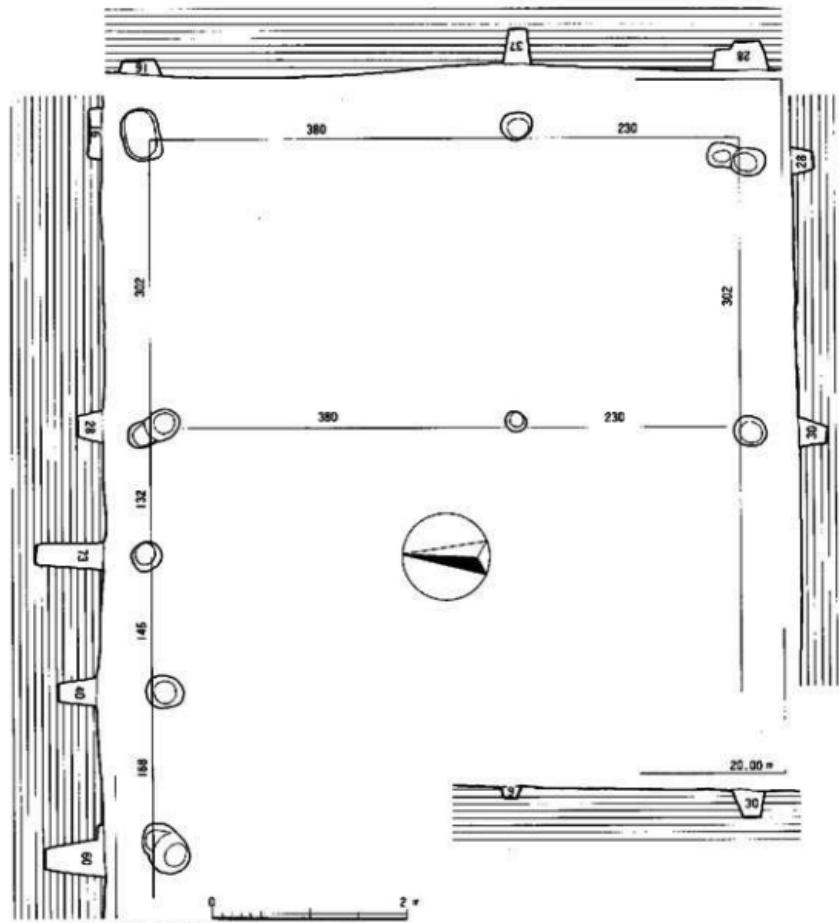


74 第9号住居跡

(2) 掘立柱建物跡

地山と造構覆土との識別は容易だったためにピットなど造構の掘り残しはない。しかしピットの個数からして多くの掘立柱建物が建っていたものと推定されるが、確認できたのは4棟にすぎない。これらの掘建柱建物跡も柱間が均等なものはない。

第1号掘立柱建物跡 (75~77) 発掘区の西北隅に位置する。建物の西北側は発掘区域外に出ているために全体は不明。東西棟で柱間、柱穴の深さともにばらつきがある。



75 第1号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/60)



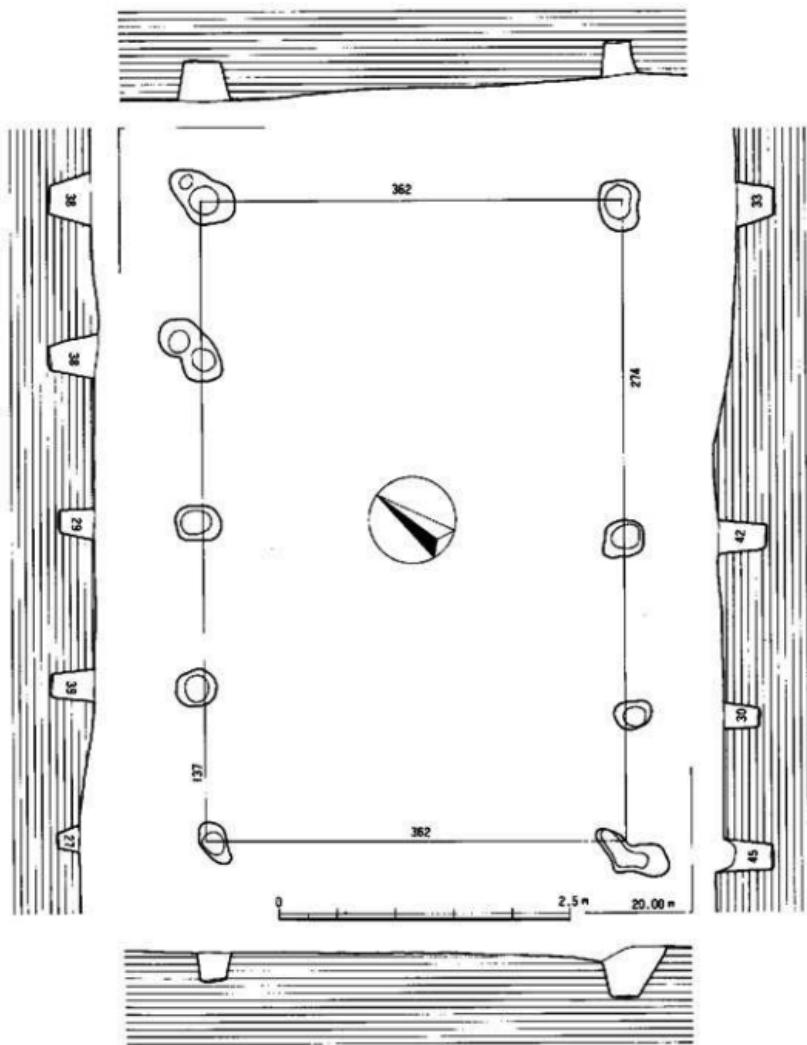
76 第1号掘立柱建物跡



77 第1号掘立柱建物跡

44 第2号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (78~80) 発掘区の中央部に位置している。1×4間の東西棟建物である。桁行は全長 550 cm あり、柱間は 137 cm の等間隔に近い。梁行は 362 cm を測る。南側柱列は 4 個の柱穴のみが残っているが、もう 1 個は後世に攪乱を受けて消失している。



78 第2号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/50)



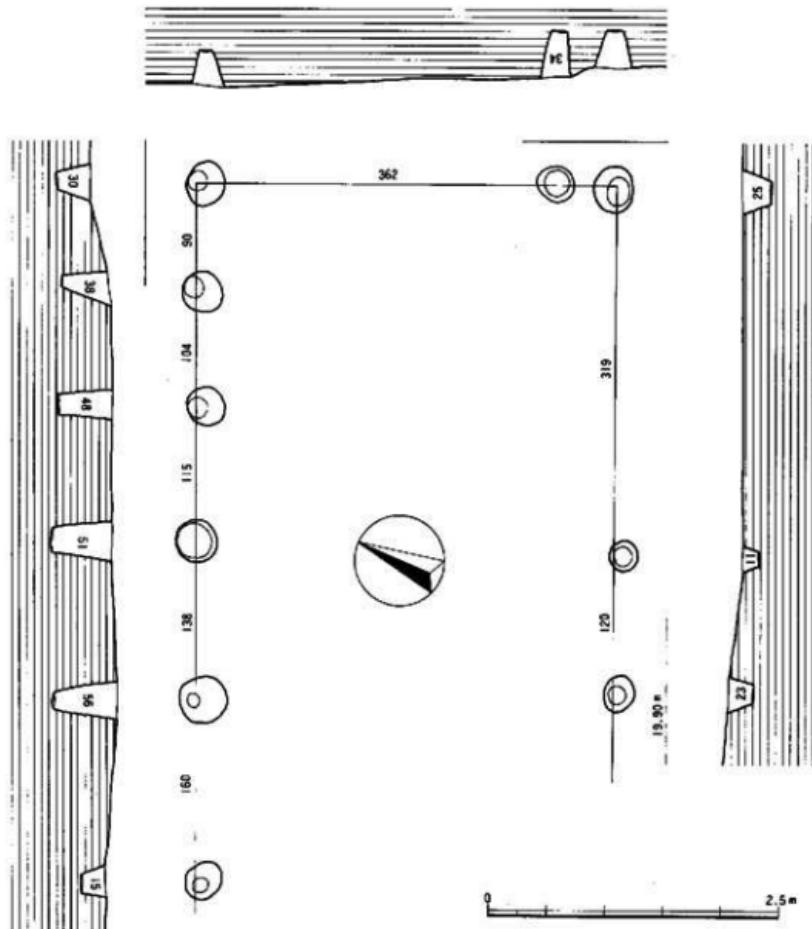
79 第2号掘立柱建物跡



80 第2号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡 (81~83)

発掘区の南西隅で検出したもので、第8号住居跡の西側1mに隣接した位置にある。西側柱列が発掘区域外に出ているために規模は確認できない。検出部で桁行長は北側柱列で607cm、南側柱列で439cmを測る。梁行長は362cmである。1×5間以上の建物であるが北側柱列の柱間は、90、104、115、138、160cmと等間隔ではない。柱穴は径40cm前後の円形で、柱の深さは地山が削平されており同じではないが、柱穴の底部はほぼ同レベルである。



81 第3号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/50)



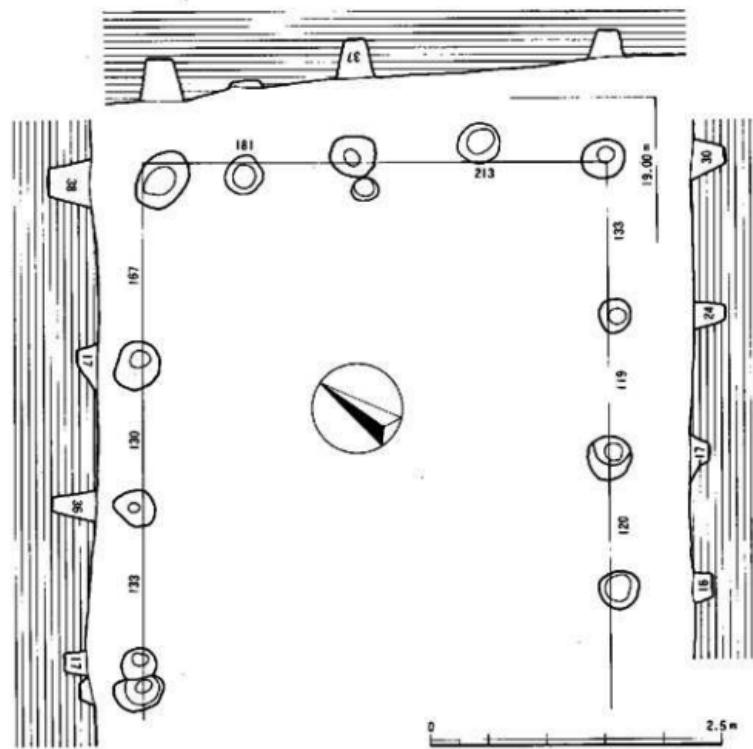
82 第3・4号掘立柱建物跡



83 第3・4号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡 (83, 84)

第3号掘立柱建物跡と重複している。同じように西側柱列が発掘区域外にあるために規模は不明。3×4間以上の東西棟建物である。桁行の長さは432cm以上、梁行の長さは400cmを測る。柱間は、各柱列ともに等間隔ではない。



84 第4号掘立柱建物跡実測図(縮尺 1/50)

これら4棟の掘立柱建物跡の柱穴からは、遺物の出土は少なく、かつ細片であったために時期を決定するには至らなかった。

(3) 竪 穴

竪穴は発掘区の中央より南側にかけて3基を検出した。

第1号竪穴 (85~92)

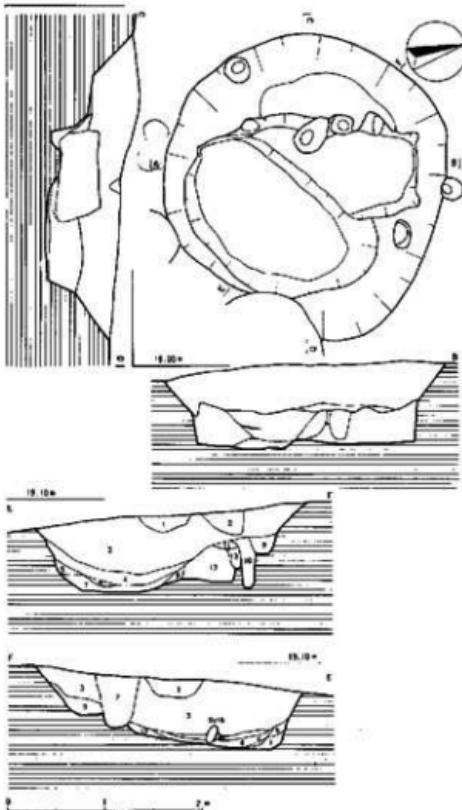
第1号竪穴は発掘区の南隅に位置する。第3号掘立柱建物跡と重なっているが、第1号竪穴の覆土に柱穴が掘りこまれていることから、両者の先後関係を知ることができる。竪穴のプランは不整円形で 294×317 cmを測る。土層を実測しながら発掘していったが、土層によると1~8層と9~13層の二つに分けられる。須恵器などの遺物は1~8層から出土し、特に3層下部に集中している。9~13層からは遺物の出土はない。また竪穴の壁は角度をもって掘りこまれ、中位より垂直近くに変っている。これらのことから時期の異なる造形重複の可能性があり、慎重に掘り下げた。この結果、竪穴の底部に切りこまれた長方形の半扭部を検出した。長側は200cm、短側は100cm、高さは45cmを測る。両長側壁は木棺墓のように短側壁に5cm入りこんでいる。

出土遺物 (88~92)

須恵器と土師器が多く出土したが他遺構よりも完形品や大型破片が多いのが特徴である。

須恵器　杯蓋4点、杯身9点、高杯3点、匙1点、甕1点の18点を図示した。

Su 1~4は杯蓋である。いずれも体部の



85 第1号竪穴実測図(縮尺 1/60)

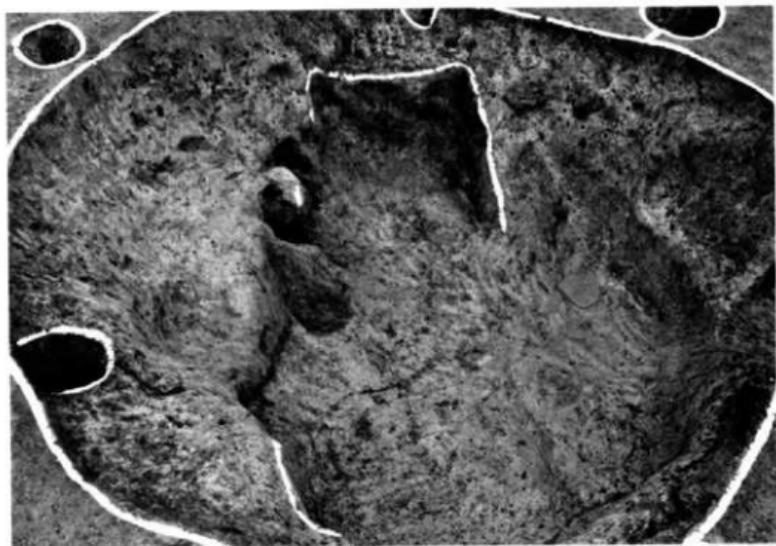
[土 層]

- | | | |
|----|--------|-----------|
| 1 | 灰褐色粘質土 | 砂礫混り |
| 2 | 黒色土 | やや褐色ぎみ |
| 3 | 黑色土 | 土器片含む |
| 4 | 黒色土 | 茶色粒土を多く含む |
| 5 | 暗褐色土 | |
| 6 | 褐色土 | |
| 7 | 黑色土 | やや青み |
| 8 | 赤茶色土 | 地山粒上を多く含む |
| 9 | 暗灰褐色土 | 褐色粒土混り |
| 10 | 黑色土 | しまり悪い |
| 11 | 暗灰褐色土 | 褐色粒土混り |
| 12 | 褐色土 | |
| 13 | 黒褐色土 | |

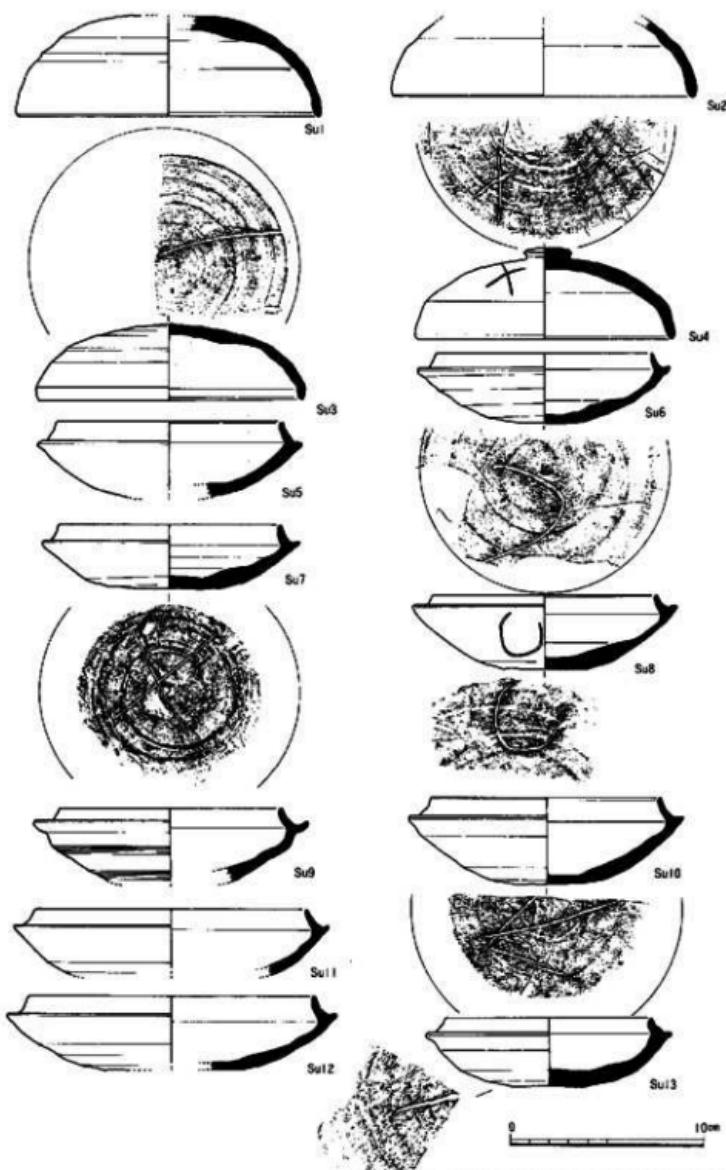
50 第1号竖穴



86 第1号竖穴



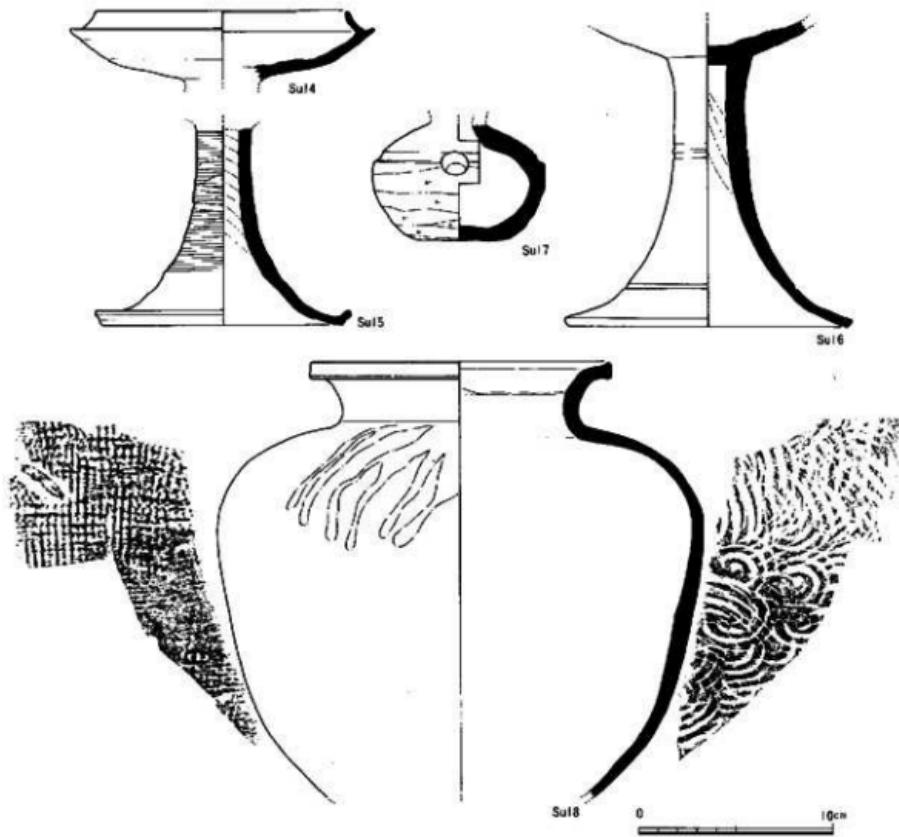
87 第1号竖穴



88 第1号墳穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

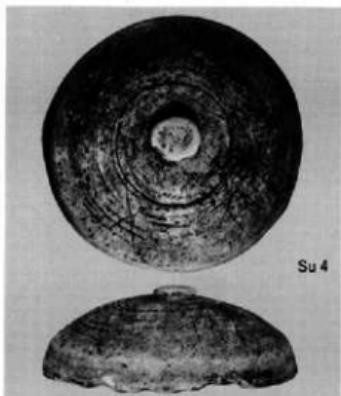
52 第1号竪穴の遺物

境が明瞭な境をなさない。Su3の口径は13.8cm、器高は3.9cmで、体部は垂直に立っている。天井部のヘラ削りは全体の1/2弱を占めている。天井部にはヘラ記号が見られる。Su4は偏平なつまみを持つ。口径は13.5cmで、天井部は2か所にヘラ記号がある。Su5~13は杯身である。Su5の受部は小さく水平に突出しており、たちあがり部は内傾が強く、その先端近くで上方に小さく屈曲している。底部のヘラ削り痕は明瞭でない。Su6、7、8、10、13は底部にはヘラ記号が見られる。Su10~12は口径が大きく、たちあがり部の長い杯身である。たちあがりは、中位で屈曲している。底部のヘラ削りは1/2以上を占めている。Su13は逆に口径が10.8cmと小さい杯身で、受部、たちあがりも短い。また器壁の厚いつくりをなす。Su9は、受部が水平ではなく湾曲して



89 第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

おり、底部はカキ目調整。Su14~16は高杯である。Su14は杯部で脚部との接合部より剥離している。受部は水平ではなく、たちあがりは1.5cmと長い。口縁部と外面の調整は横ナデ。杯部内底にはナデを加えている。口径13.0cm。Su15は脚部で、堅敏な焼成となつており内面は灰色、外面は灰黒色を呈する。筒部から大きく開いて裾部となり端部は斜め上方に折り曲げている。端部外面は横ナデし凹線状をなす。筒部外面はカキ目調整後に2条の沈線を巡らしている。内外面ともにしばり痕がよく観察できる。Su16は杯部の一部が残っている。焼成は完全でなく淡灰色を呈する。脚部の底径は14.7cm、高さは14cmを測る。裾部は緩やかに大きく開いているが、端部は折り曲げずにそのままおさめている。調整は横ナデ。筒部の中位に2条、裾部上方に1条の沈線がある。杯部内底はナデ調整。Su17は腹で口頸部を欠いている。体部は球形ではなく、底部が平坦に近く安定感がある。体部の最大径は中位にあり、9cmを測る。上半部は湾曲せず直線的に内傾し締った頸部をなす。外面の調整は上半が横ナデ、下半はヘラ削りである。体部中位よりやや上に幅広の沈線を巡らして、ここに径1.4cmの小孔を穿っている。Su18は第4層の黒色土より出土した。底部を欠いているがほぼ全形を知りうる壺である。体部の張りは上位にあり、頸部は短く内湾し口縁部をつく。口端部は上方に小さく突



Su 4

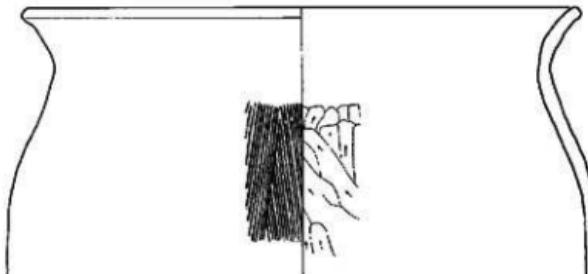
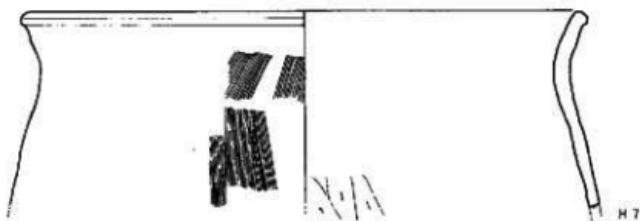
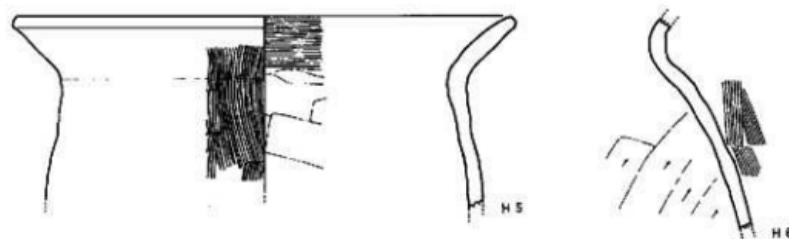
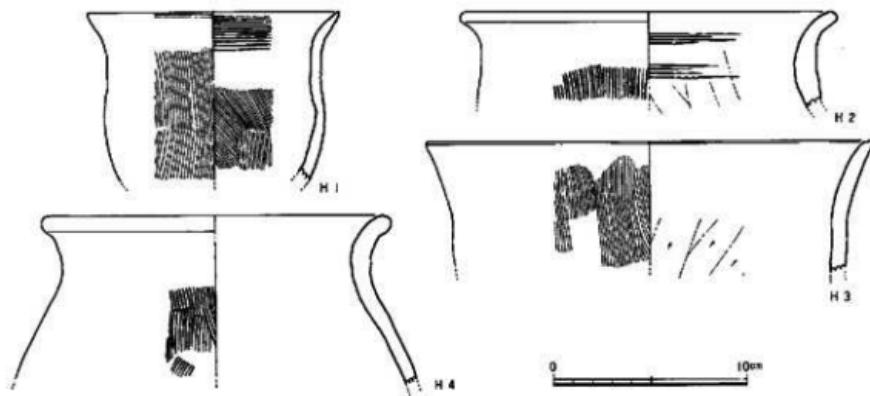


Su 15



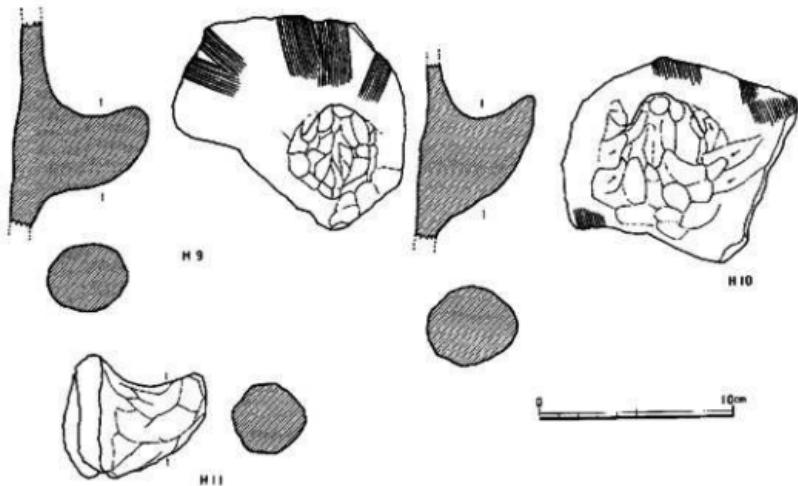
Su 18

54 第1号竪穴の遺物



91 第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

出して外端は垂直に落としている。口縁部から体部上半の肩部にかけて厚く自然輪がかかっている。体部の調整は内面は同心円文叩き、外面は格子文叩きである。口径15.4cm、体部最大径26.2cm。
土師器 H1は口径13cmの小型甌で底部を欠いているが丸底をなすのであろう。体部に張りがなく、口縁部は直線的に外反して口端部は尖り気味となっている。H2は器壁の厚い口縁部破片で、内面は横ハケ目は後に横ナデ調整を加える。H3の口縁部はH1に類似している。体部は湾曲せずに底部へ続くのであろう。口径23.4cmで口縁部の横ナデ調整後に体部のヘラ削りとハケ目調整を施している。H4の体部上半は内傾して頸部をつくり反転して丸みのある口縁部がつく。口径18cm。H5はく字形に外反する口縁部がつく。体部内面は左上りのヘラ削り、外面は縦の粗いハケ目調整。口径は26.2cmを測る。H6は体部上半の小破片のために径は不明。その傾きはH4に近い。調整は外面が縦ハケ目、内面は右上りのヘラ削りで幅は約1.8cmある。H7は小砂粒の多い胎土が用いられ、赤茶色を呈する。体部上半の縮りではなく、直線的に外反する口縁部が続く。端部は強く横ナデして折り返したように下方に垂れている。体部内面のヘラ削りは左上がりの方向で、口縁部より9cm下方より施されている。全体的に調整は丁寧である。口径は29.8cmを測る。H8の体部はH7に比べふくらみがあり、口縁部の外反も強い。口径は28.5cm。体部外面は縦のハケ目調整、内面は細かい左上りのヘラ削り。H7、8の外面には煤の付着はないが顯か。H9～11は甌の把手である。3点とも胎土、手法の違いから同一個体の把手ではない。H9、11の先端が丸いのに対し、H10は先細く成形されている。



92 第1号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

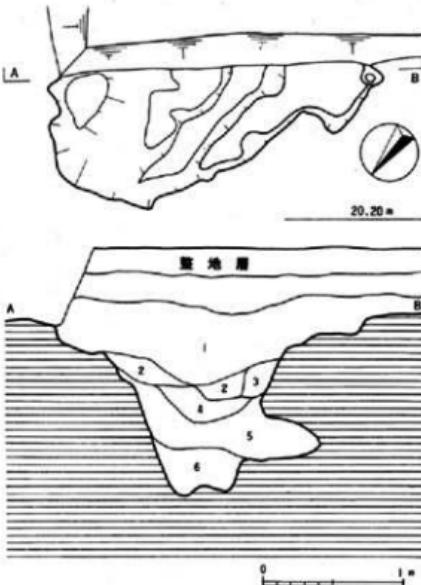
第2号竪穴 (93~96)

第2号竪穴は第1号竪穴の北西7mにあり、大部分が発掘区域外に出ている。第4号掘立柱建物跡の北側柱列のがびており、両者の先後関係を判断できる部分であったが、すくなくとも覆土中においては確認できなかった。プランは不整形で、周囲の壁は、上部が緩やかに掘りこまれ、途中より傾斜が強くなっている。壁、底部ともに凹凸がある。遺物の出土は第1層黒色土の下部に集中している。この層は遺跡全体を覆っている層である。断面図によると、地山の変化にそって横に壁が入りこんどおり、ある程度の湧水があったことも考えられよう。

出土遺物

部分的な検出に止まつたが遺物の出土は多く、須恵器12点と土師器14点を図示した。

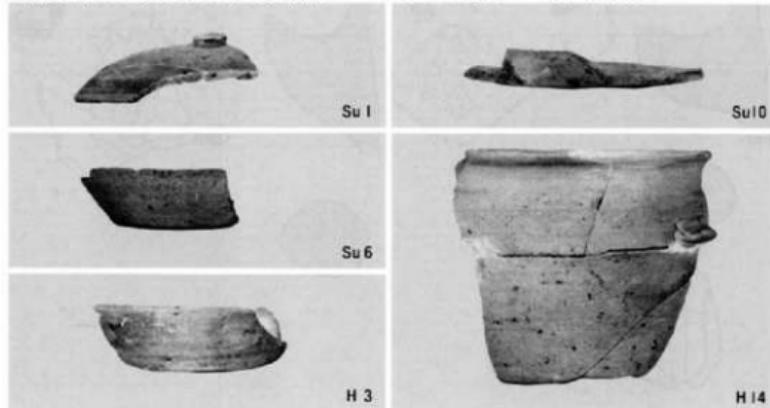
須恵器 Su1は杯蓋で口径は15.2cm。天井部はわずかにふくらみがある。体部との



93 第2号竪穴実測図(縮尺 1/40)

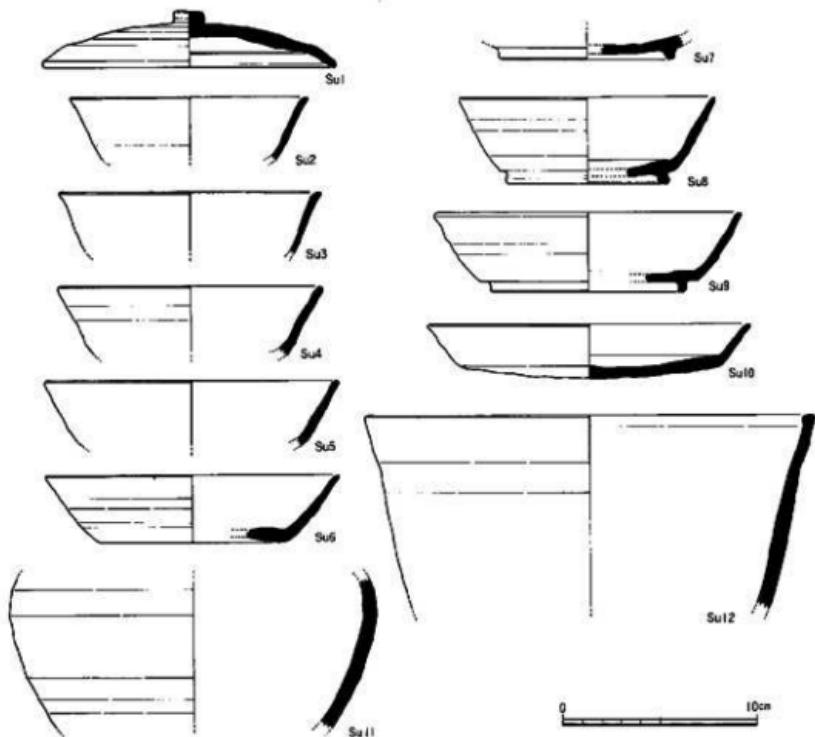
〔土 層〕

1 黒 色 土	4 黒 褐 色 土
2 黒 色 土	5 深茶褐色土
3 黑褐色土	6 茶色粘質土



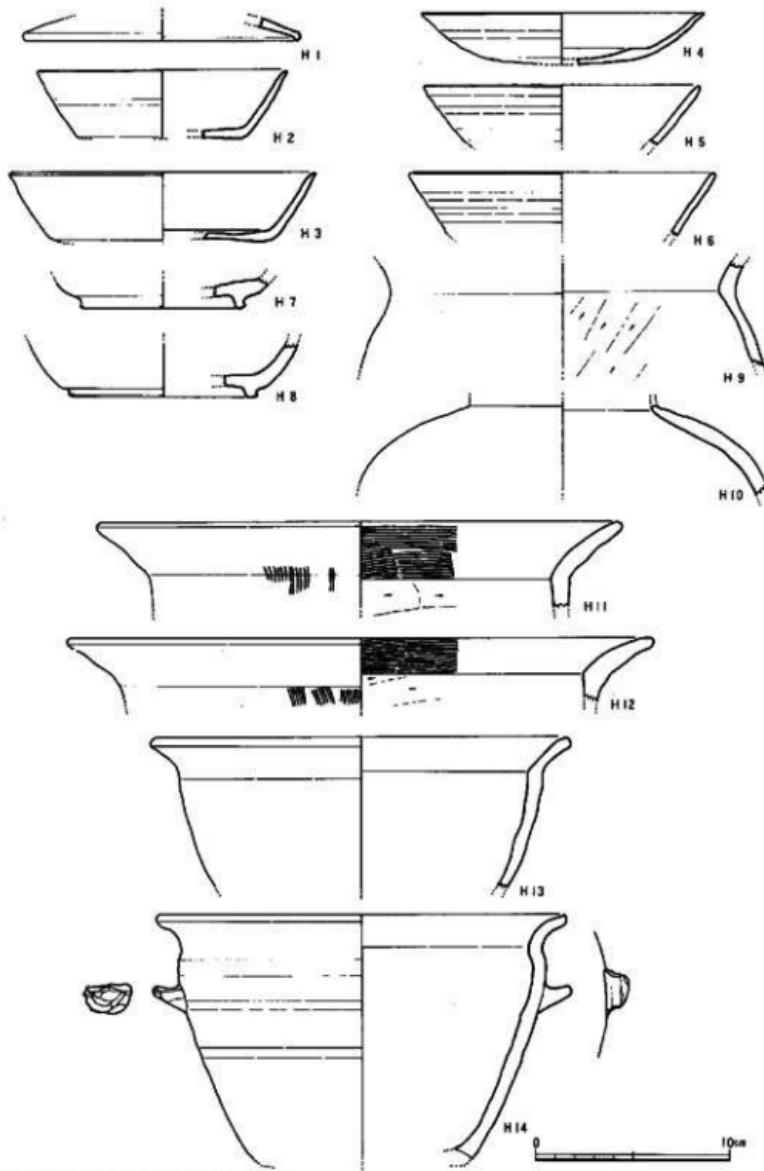
94 第2号竪穴出土遺物(縮尺 1/3)

境は屈曲しているものの明瞭な段はない。端部は折り曲げて内面に浅い沈線を1条巡らしている。また体部屈曲部内面にも見られる。天井部には背の低いつまみがつく。Su2～6は杯で底部が残っているのはSu6のみである。Su2～5の体部は、ほぼ同じ傾きをなし口端部は丸くおさめている。Su3の口端部は上面を外側に引き出している。4点とも調整は丁寧で堅緻な焼成となっている。口径は12.4～15.4cmを測る。Su6の体部の傾きは弱く、その長さも4.3cmと長い。横ナデ調整であるが外面は細かい凹凸がある。Su7～9は有高台杯である。Su7は高径9.2cm、内底は横ナデ後にナデ調整。Su8の高台は体部との境より内側に貼りつけている。Su9の体部は底部と明瞭な境をもつ。横ナデ調整はきわめて丁寧である。口径16cm、高台径10.4cm、器高4.1cm。Su10の皿は口徑16.6cm。底部は平坦でなくふくらむ。焼成はよく灰色を呈する。Su11は鉢で口縁部と底部を丸く。最大径は中位より上方にあり、下半分はヘラ削りである。Su12は体部が直線的にのび、そのまま平坦な口縁をつくる。横ナデ後に内面はナデ上げる。



95 第2号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

58 第2号窓穴の遺物

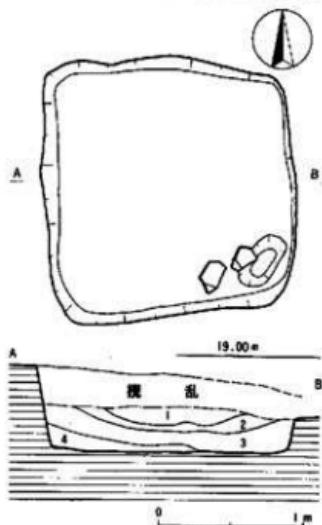


96 第2号出土遺物実測図(縮尺 1/3)

土器 H1は杯蓋の小破片。精良な胎土を用いている。口縁部は折り曲げたのではなく、横ナデで内面に浅い段をつくる。H2~5は杯。H2は口径13cm、底径8.4cm、器高3.5cm。軟質の焼きのためか器面は磨耗し調整痕は不明。H3の口径は16cm、体部は底部から丸みをもって屈曲して直線的にのび、口端部でさらに小さく外反する。底部は切り離し後にナデを加えている。H4は丸底杯で、口径は14.6cmを測る。丸底杯はこの1点のみである。H5、6はいずれも底部を欠く。口径はH5が14.4cm、H6が16cmである。H10は壺肩部の破片のために全形を知りえない。頸部はよく縮り、屈曲部は丸みがある。この部分の器壁が薄くなっている。H9、11~14は甕。H9は甕の体部上半で、く字形に外反する口縁部がつく。小破片のために傾きが不正確であるが、体部の張りはさらに小さいか。H11、12は同じような形状の口縁部を持つ。体部上半は直線的に立ち、屈曲して口縁部がつく。屈曲部の内面にはよい綾がある。H11の調整は、体部外面の縦ハケ目後に横ナデ調整。内面は右方向のヘラ削り。口縁部内面の構ハケ目は右から左の方向である。H12は口縁部内面の横ハケ目調整後に体部内面のヘラ削りをしている。H13は口径22cm。く字形口縁部から体部は張りのないまま底部へと続く。口縁部は強く横ナデしており屈曲部で小さな段がつく。体部外面は構ナデ後に上下にナデしている。H14は赤茶色を呈する甕で、口縁部から頸部にかけてS字形をなす。頸部近くに小さな把手を貼りつけている。体部は細かいミガキ風の横ナデ調整。底部との接合部で剝離している。

第3号竪穴 (97、98)

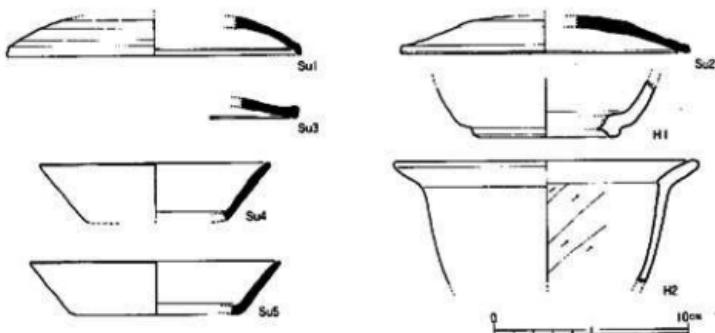
第3号竪穴は第2号掘立柱建物跡の西1.5mに位置している。プランは隅丸方形で、東側は



削平されている。各壁の長さは東壁が150cm、西壁が168cm、北壁が158cm、南壁が148cmを測る。各壁はほぼ垂直に掘りこまれており、遺存状態のよい西壁で57cmの高さである。底部は平坦であるが、南コーナーには床面より掘りこまれた楕円形ピットがある。竪穴の覆土はレンズ状に堆積しており、最下層の4層は現在の地山傾斜と同じように北より南に向かって堆積している。覆土と底部より数点の遺物が出土した。

須恵器 Su1~3は杯蓋。Su1の天井部は丸みがある。

口縁部は小さく折り曲げており、内面に段をつけている。



98 第3号竪穴出土遺物実測図(縮尺 1/3)

Su 2 も同じように天井部を欠く。口縁部は外に開き折り曲げは弱い。Su 3 は口縁部の小破片で口径不明。口縁部は折り曲げで肥厚し偏平な天井部をつくる。Su 4、5 は無高台杯。Su 4 の口径12cm、推定器高3.1cm。Su 5 は口径13.2cm、底径8.6cm、器高2.3cm。底部から丸みを持つて屈曲し体部は直線的にのびる。横ナテ調整は丁寧である。H 1 は有高台杯。器壁の厚いつくりで高台は体部の境より内側につく。器面は磨耗しており調整痕不明。H 2 はく字形口縁の小型甕。屈曲部内面は内側に小さく突出する。器面は磨耗して2mm大の砂粒が露出している。

第3章 小 結

これまで竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴の順に各遺構とその出土遺物について記してきたが、次に調査の成果と問題点を整理して、まとめとする。検出した9軒の竪穴住居跡は、出土遺物から第3、5、6、7、8号住居跡の5軒が6世紀後半から7世紀にかけて。他の3軒が7世紀後半から8世紀の大きく二つの時期に分けられる。いま前者をA期、後者をB期とする。A期の5軒は第6号と第7号が切り合っており先後関係にあるが、第5、6、8号住居跡はかまどの位置や住居跡の方向が一致するなど共通点が多く、その位置も著しく接近していないことなどから同時期に営まれていた可能性がある。第3号住居跡は規模も大きく、かまどの位置も異なるが出土遺物には時期差は認めがたい。B期は第1号と第2号住居跡は切り合っているが短時間のうちに建て替えられている。第9号住居跡は遺物が出土していないために時期が確定できないが、その方向はB期の住居跡に類似している。同じように時期不明の掘立柱建物跡もその方向のみからすれば、第2号掘立柱建物跡がA期、他の掘立柱建物跡がB期に当ろう。3基の竪穴も第1号竪穴がA期、第2、3号竪穴がB期となる。A期とB期の各遺構は継続して営まれたのではなく、断絶する期間がある。また本遺跡の包含層より出土する遺物はB期より特に新しい遺物ではなくB期以降は現代まで生活面としての土地利用はなされていないようである。予想に反して弥生時代の遺構、遺物は皆無に近く那珂台地や春日丘陵に分布する遺跡としてはきわめて特異な遺跡であるということができよう。

福岡市博多区
南八幡遺跡群(Ⅱ)

トナン遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第128集

© 1986年3月31日発行

編集
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目7-23
電話(福岡)711-4667

印刷 ダイヤモンド印刷(株)
電話(福岡)621-8711

